
バカとリンと召喚獣

風影 黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとリンと召喚獣

【Nコード】

N0900Z

【作者名】

風影 黒

【あらすじ】

試験召喚獣システムが使われた試験校、文月学園。そんな中、Fクラスに所属することになった黒井小鈴。幼なじみの吉井明久と共に勉学とオカルトと恋(?)に忙しい学園生活をどう突き進む!?

プロローグ（前書き）

処女作となります。

少しでも楽しんでいただけたら嬉しいです。

プロローグ

文月学園に入学して二度目の春がやってきた。

校舎へ続く坂道を歩く人影がチラホラ見えてきた中、普通の人らしくない集団に囲まれている人影があった。

肩の辺りがボサボサに切られている赤い胴着を着ている武道家。下駄にリーゼント、学ランと昔のマンガから出て来た様な不良（口には葉っぱ）。剣道着を着てる者。薙刀を構える女性や覆面に鎌をもつて愛を叫んでいる者（？）。どう見ても普通じゃない空間が文月の登校路で起こっていた。

だが、周囲にいる登校途中の生徒達は誰も目を向けない。気にもかげずに坂を登っていく。

それもそのはず。なにせ、普通じゃないこの空間がここで起こるのはよく（・・・）ある事だから。

そして、集団に動きがあった。

「……今日こそ、今日こそ勝たせてもらうぞ、『黒子』!!」

「いぬ」

「……尋常に」

「……………勝負!!!!」……………一人、二人、果てには全員が雄叫びの後、中心目掛け走り出す。その表情には決死さえも見えるようだった。

さて、中心にされてしまった人物はと言うと。焦った様子も見せていない。手に持っていたカバンを足元に落とし、指で眼鏡にかかる銀髪を払いながら、接近してくる人々を見ている。

そして…

「……………ニヤハ！」

鈴の音と共に姿が消えた。

「西さん、二一八才」

玄関前で生徒達に封筒を配っている先生の中でも目立つ、浅黒い肌で短髪、去年の担任である先生に挨拶をする。

「二一八才は朝の挨拶じゃないぞ。それに、西村先生と呼ばんか、黒井!」

西村宗一郎。別称、鉄人。生活指導の鬼と呼ばれているが、去年から親友や悪友のおかげで学園で一番親しくなった先生だろう。

「そうでした。すみません、西さん」

それでも変えないから溜息混じりでこちらを見る。半ば去年から変わらないうり取りで根負けしているのだろう。

「それとだ、黒井」

西さんが視線をずらして今登ってきた坂道に目を向ける。

「あれはまたお前か？」

「ん、でも誰にも触れてませんよ？」

視線の先には先程の人々が倒れて山積みになっていた。

「……まあいい。ほら、お前のだ」

そう言う箱の中から一枚の封筒を手渡す。

「ありがとうございます。…中身はわかりませんが」

「そうだな。しかし、お前のやった事は人として誇れる事だ」

「……それでは失礼します」

頭を下げ、脇を通り抜けていこうとするが足を止め、再び話し掛ける

「西さん。カンなんですが今年もお世話になります」

「…という事はあいつらともか、ヤレヤレ」

お前のカンはよく当たるしなつと深い溜息をつく西さんに苦笑しながら今度こそ下駄箱へと向かう。

「……誇れる事、ね」

取り出したペーパーナイフで封筒を開き、中に入った紙を引っ張り出す。

『黒井小鈴……Fクラス』

「オレはそんなんじゃないよ」
こうして最低クラス生活が幕を開けた。

プロローグ（後書き）

お目通し、ありがとうございます。
良い作品を作るよう、訂正、感想、アドバイスなどをしていただけたら嬉しいです。

プロフィール（前書き）

プロフィールです。

少しオリ主を特殊にしてみました。

プロフィール

プロフィール

黒井小鈴（くろい こすず）

銀髪ショート 眼鏡 猫（虎？） 明久に忠臣？

身長、明久より10?ぐらい低い

体型 細型だが鍛えているから女子（！！）としては少し重い

特技、暗算、嘘発見、手品

苦手、嘘をつくこと、怖い話

性格、明久を中心に回ってる？ 多人格

一人称―二人称―三人称、オレーお前―あいつ

明久に恩があるので明久に尽くしたいとすら考えてる。

恋 無双の華雄さんに眼鏡をかけ、胸なしな感じ。目つきがきついのもあってあまり女子らしく見られず、楽だからと男子の制服を着用。

明久の上の階に一人ぐらし。明久と家族で知り合い。

プロフィール（後書き）

お目通しありがとうございます。
ということ、オリ主は男娘と書いて（オトメ）と言つのを目指して
みます。

アドバイス、訂正、感想は大歓迎です

一話目（二学年・試召戦争、開始）（前書き）

更新です。

鈴がFクラスの面々とどういった感じなのかをだしましたが…予想より長くなりました。

簡潔にまとめる他の作者さん達を尊敬します。

…こちらも長くなってしまいました。

楽しんでいただけたら幸いです。

一話目（二学年・試召戦争・開始）

「……大戦時代か、ここは？」

真つ直ぐ旧校舎に向かい、Fクラスらしき教室の前にやって来たのだが……

「ちゃぶ台（脚折れ少々）、座布団（中身スカスカ）、窓は割れて何故か×印にテープ……ここだけ『欲シガリマセン、勝ツマデハ』の時代に来たか？」

おまけに天井にはクモの巣、教室に敷き詰められた古い畳はかび臭い上、キノコが生え、壁にひびと落書きで埋め尽くされている。正直、廃校の方がましじゃないか？

「ん？そこに居るのは鈴か？」

呆れて教室を眺めていたら一人の生徒がこちらを見て手を振っていた。

目を向ければ去年のクラスメート、女子が羨むスラっとした身体。女性が嫉妬しそうな優しい微笑み。男性を虜にしそうな癒し空間を漂わす木下秀吉（ ）がいた。

「ん？主、妙な事を考えなかったか？」

「んにゃ。去年と同じくだなんて思っただけさ。しばらくぶり、ヨシヒデ」

「ワシは秀吉じゃ」

「羽柴の？」

「木下じゃ」

「徳川は？」

「秀忠じゃな」

『イエーイ』

「あんたらまたやってるの？」

軽い掛け合いをしていると一人が呆れたようにしながら声をかけてきた。

見てみれば友人がいた。

「おはよう、スズ」

「おはよう、ミナ。ミナもやっぱりFだったか」

スラッとしたモデル体型。ポニーテール。帰国子女の友人、島田美波。挨拶を返すがニッコリ笑ったかと思っただらこちらの腕を掴み…

「やっぱりって何!? ウチがバカだっただけじゃないの!!!?」

「朝からF固めはきつい、キブキブ」

「のわりには余裕ありじゃな」

関節技をかけられた。若干余裕はあるがきついものはきつい。

「ミナ、江戸幕府が開かれたのは何年?」

「…」

「ベンゼンの化学式は?」

「…」

「さて、言うことは?」

「すみませんでした」

未だに漢字がイマイチらしいがこういったのもあるからFクラス入りなのだ。まあ、そんなことを言えば暴走して、関節技が骨折技に変化するから言わない。

「それと、早く解かないとムッチーが覗いてるぞ?」

「えっ? キヤアアア!」

「……覗いてない」

「鼻血で畳が赤いぞい」

いつの間にかいたのか小柄、気配なし、カメラ小僧。土屋康太ことムッチーがいた。

「全く、相変わらず。むつつりスケべめ」

「…おれはスケべじゃない」

「何色だ?」

「白」

「コラアアアア! ……!!!」

怒声と共に身を伏せれば頭上を美波の右足が通る。髪を二、三本持つていき、その威力を感じさせる。

「あ、あんたら!!!こんな場所でなんてことを言うの!!!?」

「誰も誰の、何がとは言っていないが?」

「…誘導尋問は卑怯」

「誘導と尋問、まとめて辞書で調べてこい」

「お、い、そこ。悪いが騒ぎはそこまでにしてくれ」

じゃれあいがあるところになってきた所で声がかげられた。見てみれば教壇に赤髪、長身の奴がこちらを見ていた。

「…なんだ雄ツーか」

「待て、ツーってなんだ?俺はロボットじゃないぞ?」

「んじゃU2」

「変わっていないぞ!?雄がUに変わったぐらいだぞ!?余計ロボットはなくなったぞ!?!」

「えっ!?違うつけ、戦闘用・アンドロイド、サカモト-U2。モデル、悪鬼羅刹」

「それっぽく付けるな!?!?ってか1がいるのか!?別モデルがあるのか!?!」

「っでなんで教壇に立ってんだ?」

「話をいきなり戻すな!?!…ああ先生が遅れているらしいから、代表としてまとめようと思っただけ」

こいつが代表であるのを驚くと同時に以外な行動に感心した。

野生児、狂暴、外道。去年からの悪友、坂本雄二。それがFクラスとは言え、代表として行動をするのが意外に思…

「それに俺の兵隊になる奴らの顔を見ておきたかったからな」
訂正、やっぱりこいつはこいつだ。

「それはそうと、あのバカはまだ来てないのか?」

「…来てないけど、あまりバカバカ言うな」

「事実だろ?」

「……なら、誰かさんが黒髪、長髪の撫子美人さんと仲が良いって
事実を言い触らしても事実だからいいよな？」

「なっ！？待て！！お前、何処でそれを！？」

「さて、このクラスから始めるか」

「待て！！」

「皆知ってる？こいつ、あのきり」すいません、ちよつと遅れちゃ
いましたっ」「まさんと……って」

出鼻をおもいつきり砕いてくれた人物は、ネジが一本抜けたような
表情。ちよつと中性的な顔。イジられやすい雰囲気。そして、学園
内、唯一の肩書を持つもの、吉井明久がいた（遅刻）。

「……リンに雄二、何やってんの？」

「……ハッ、早く座れ、このウジ虫野るウオオオオオオ！！؟؟？」
スタタタタタタツッ！！

明久を罵倒しようとした雄二だが飛来物によって中断され、膝をが
に股に開け、両手を股間に持ってきた奇妙なポーズで固まっていた。
雄二の皮と制服すれすれの所に鈍い光を放つ大量の苦無と手裏剣が
刺さっていた。そしてそれを行った犯人は……

「っテメー、何しやがる！！？」

「……スマン、条件反射だ」

オレである。

一話目（二学年・試召戦争、開始）（後書き）

個人的に、猫は気まぐれで掴み所がないとおもっています。
アドバイス、感想などいただけたら嬉しいです。

プロフィール + (前書き)

オリ主が想像しにくいので追加します。

プロフィール+

小鈴の容姿、召喚獣について

容姿、恋 無双の華雄に文月学園の制服（男子）を着用。外見からの見た目は胸なしにしてください。
眼鏡着用。
首に鈴付きチエツカーを付けます。
手袋を付けています。

手袋着用などの理由や秘密は作品中で少しずつ出していきます。

召喚獣

華雄です。ただし、武器は戦斧と鉄扇を片手ずつに持っています。
能力はCクラス上位くらい。

得意科目：数学、170～200

苦手科目：国語、80～110

他は130～160ぐらい

クラス基準

Fクラス…900未満

Eクラス…900～1200

Dクラス…1200～1500

Cクラス…1500～1800

Bクラス…1800～2000

Aクラス…2000～

（Aクラス上位3000以上）

科目数…10（国語、古文、数学、化学、生物、物理、保険体育、

英語リスニング、英語W)と考えると
他にも何か変更、追加ができればコチラに追加します。

プロフィール + (後書き)

質問などがありましたら回答をこちらに追加します。

二話目（前書き）

なんか、伏線だの謎だので時間がかかってしまいました。
お気に入り登録してくださって方々がいらっしゃいました。ありが
とうございます。

それでは、楽しんでいただけたら幸いです。

二話目

<バカテスト、化学>

【第一問】

問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。』

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っ掛かりませんでしたね。

黒井小鈴の答え

『問題点……マグネシウムだと炎色反応を起こすから危険』

合金の例……ステンレス鋼』

教師のコメント

正解です。ステンレス鋼は錆に強く、包丁にも使われるそうです。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

合金の例……酸化鉄』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。さらに、錆だらけの鍋で料理するつもりですか。

吉井明久の答え

『問題点……花火みたいに火花がでて、家が火事になる

合金の例……未来合金（　すごく強い）』

教師のコメント

問題点は一応正解ですが、確か花火にマグネシウムを利用しません。後、すごく強いと言われても。

「それにしても……流石はFクラスだね」

「半ば病気になる。もしくは、バカは病気になるって言わんばかりだな」

「テメーら、ほのぼの会話してんじゃねえー!!」

教室を眺めながら互いに溜息をつきあっていると後ろから怒声をぶつけてくる輩がいた。

「あれ？雄二、いつまでビートたけしのギャグやってるの？」

「そういえば明久知ってるか？ビートってのはてんさいという野菜のことで、天才たけしって意味合いを持っているんだそうだ」

「へえ〜」

「だからほのぼのしてるな!!それと好きでやってんじゃねえ!!
鈴、いきなり何しやがる!!!?」

「…仏の顔は三度までという諺がある」

「ん？ああ……」

「オレの顔は明久までだ」

「どんな限界だ!？」

「えーと、ちよつと通してもらえますかね？」

不意に明久の陰から覇気のない声がした。

覗き込めば弱々しい風貌をしたオジサンが入口で立ち往生していた。ようやく担任が来たみたいだ。

「それと席についてももらえますか？ホームルームを始めますので。

後、教室であまり暴れないように、色々と壊れやすいですから」

「はい、わかりました」

「すみません」

「さつさと外せ!！」

耳元でぎゃんぎゃん騒ぎ立てるのを無視したい所だが先生に迷惑がかかるので助け出しておいた。

そして、他のクラスと比べて遅いホームルームがやつと始まった。

「えー、大変お待たせしました。おはようございます。二年F組担当となりました……………」

「先生、どうぞ」

「ありがとうございます。黒井さん」

「イエ、初回特典の名刺代わりです」

黒板に名前を書こうとしていたが、まともなチョークすら用意されてなかった。商品名の……チョークを先生に手渡し、席に戻った。

「改めまして、担当の福原です。よろしく願います。さて、Fクラスの設備について確認します。皆さん全員にちゃぶ台と座布団は支給されますか？不備があれば申し出て下さい。環境が不備だらけだと思うのだが……」

「センサー、おれの座布団に綿が入ってません」

「我慢してください」

「センサー、ちゃぶ台の脚が折れてます」

「木工ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

「センサー、窓が割れていて風が寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

+ 対応も不備だらけか。

「必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください」

「！先生、必要と思つた物を自分で調達していいんですか？」

「？ええ、Fクラスはそういう事になっています」

「わかりました。ありがとうございます」

聞き逃せない言葉を再確認して、携帯でしっかりと言質を保存しておく。これで色々とできるだろうが……時間があればクラス設備設定と校則の隙間の再確認とかも調べておこう。

『リン？何する気？』

思案を巡らしていると前にいた明久が振り返って、こっそり耳打ちをしてくる。

『此処じゃあつという間に病気になる。色々持ってきてマシな状態にするついでに、活用させてもらおうと計画中』

ピンチをチャンスに。短所を長所に改造するのが師匠の教えだからな。使えるものは親や熊でも使おう。……熊はともかく、あの人はオレでは無理だな。

『そろそろ静かにしておけ。先生に目をつけられるぞ？』

『あ、うん』

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

先生の指名により、生徒の一人が立ち上がった。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しております」

独特な口調の秀吉が最初だった。しかし、男ばかりのこの教室で秀吉の周りだけ空気が澄んでいる気がするんだが。

「……と、いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

軽やかに微笑んで自己紹介を終えるが、三分の二ぐらいの男子が顔を赤くしているか？…明久が念仏を唱えているみたいだが何があったんだ？

「……………土屋康太」

後ろを気にしていたら次の生徒、ムッチーが立ち上がったかと思っ
たら、名前だけ告げてすぐに座った。そんなに目立ちたくないか？
そつえば、返さないとならない物があつたが後でいいか？

「- -です。海外育ちで、日本語は会話ができるけど読み書きは苦
手です」

鞆に押し込んでおいた物を見ていたら次の人。

ユラユラと揺れるポニーテールは……

「趣味は吉井明久を殴ることです」

それじゃDSの人だぞ、ミナ。笑顔で明久に手を振っているが正直、
天敵指定されても仕方ないんじゃないか？

しかし、冷静に周囲に視線を見渡してみれば、けっこう顔見知り以
上が多いが……偶然ということにしておこう。

淡々と自分の名前を告げるだけの自己紹介が進んでいき、明久に回
つてきた。

「ーコホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って
呼んでくださいね」

『デアアーリーーン!!!!!!』

野太い声の波動にやられて今にも明久が崩れ落ちそうだ。正直、余
波だけでも不快な気分になる。ダーリンって鬼娘とおにごっこやっ
て、電撃喰らいながらもナンパを続けた奴になるつもりか？

「ー失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願い致します」
ダメージが深いのだろう。明久の口調が若干おかしい。

そして、ようやく順番が回ってきた。

…まあ、目立つのは嫌だから必要なことだけでいいか？

「黒井小鈴です。親友の明久に何かしたら、……楽になれると思わ
ないように」

最後の言葉は少し小さく言うが上手く全体に聞こえてくれたようで、
一時的に教室が沈黙で満たされた。

『ーざわざわ- -なあ、あいつの名前、なんか女っぽくないか？』

コソコソと話し始めたので席に戻ろうとしたが……一応、それも対応しとくか？

「後、オレは生物学上、女なのでお間違えなく……」

『……………ハアツ！？』

『おい、あいつ、何言ってるんだ？』

『どこをどう見ても男だよな』

あゝ、知らない奴らが騒ぎ出した。別に自覚してるからいいが悪かつたな、女成分皆無で。

「……………あんたでいいや。これが証拠」

『ん？学生証？（黒井小鈴、性別・女性）！！？』

『まぢか、野々村！？』

『…本当だ』

『…ってか、今気づいたけどあいつ、【店】の黒井じゃねえ？』

まずい、終わりが見えなくなってきた。

いかにして終わらせようか悩んでいたら教室の扉が突然開けられた。

「あの、遅れて、すいま、せん……………」

『えっ？』

息を切らせてやってきた女生徒の姿を見て、教室から驚いた声が上がった。

それもそうだろう。彼女がここにいる訳が無いからだ。事情を知らない面々が騒ぐが……………これは助かる。

「姫路さん。今、自己紹介をしている所なんだ。丁度良いから、名前、趣味、好きな食べ物、好きなタイプ、ついでにスリーサイズをどうぞ」

そう言った瞬間クラス全体の視線が彼女に集まった。

「えっ！？は、はい！あの、姫路瑞希と言います。趣味は料理をすること。好きな食べ物は苺のショートケーキ。好きなタイプは、その、優しく元気な人が……………。スリーサイズはきゅって言えませんか！」

真っ赤な顔を両手で隠そうとしているが、耳まで赤くなっているた

め丸分かりである。クラスが異常なハイテンションになっているのは興奮状態になっていてるからだろう。(端の方でミナがうな垂れているのは最後の言葉に絶望しているのだろう)

『はいっ。質問です!』

「え?あ、は、はいっ。なんですか?」

いきなりの質問に驚く姫路の反応が小動物を思わせてさらにテンションが上がって行く。

『なんでここにいますか?』

……もう、存在を忘れられているので静かに席に座る。

失礼な質問に聞こえるが彼女がここにいる理由を知らない者には疑問であるため、仕方が無いことだろう。

成績は常に上位一桁の成績を収め続けている彼女は、その整った容姿と共に誰もが知っているからだ。

『姫路さん、かわいそうだよね』

明久がボソリツとつぶやくように言う。

文月学園の振り分け試験は途中退席は全ての教科を0点にされる。

彼女は試験中に高熱を出してしまい、退席をしてしまった。

……正確に言えばオレが保健室に連れて行ったのだが……。

『姫路さん、この教室で身体大丈夫かな?』

明久の心配通り、身体の弱い彼女には埃に隙間風、その他もろもろは悪化の原因だろう

周囲がバカ合戦をしている中、彼女のことを心配するこいつは……相変わらずと言うべきか?

『多少、明日からマシにするように手は打つが環境そのものを入れ替えないときついな』

『…環境そのものを入れ替える、ね……』

「で、ではっ、一年間よろしくお願ひしますっ!」

逃げるように自己紹介を打ち切り、空いていた明久と雄二の間に腰を降ろした。

「き、緊張しましたあ……」

安堵の息とともにちやぶ台に突っ伏す彼女に明久が声をかけようとしていた。

「あのさ、姫ー」

「姫路」

しかし、反対側の雄二の声にかき消されて彼女は向こうを向いてしまった。

けど、明久。スポットライトを浴びて絶望に喘ぐ様な事をするな。後であいつの解体作業は手伝ってやるから。

「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか？」

「あ、それはボクも気になる」

体調の話になり、さすがに気にしていたのか回り込んでまで話に参加していった。

「よ、吉井君!？」

そんな明久に驚いた表情と赤く染まって頬。ああ、また墮としたのか？

「姫路。明久がブサイクですまん」

「ユウ。お前が言うセリフじゃないし、フォローじゃなく罵倒だぞ、それ」

「そうです！目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！その、むしろ……」
やはり墮ちていたか。

「そう言われると、確かにみてくれは悪くない顔をしているかもしれないな。俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気もするし」

「え？それは誰……」

「そ、それって誰ですかっ!？」

明久を遮るように雄二に迫る姫路。遠くではミナも耳を傾けている。しかし、その行動の意は明久には届かない。届いたら色々楽になるんだが……。

「確か、久保……利光だったかな」

性別、だな。

「……………もう僕、お婿にいけない」

あー、明久が声を殺して涙河を作ってしまったている。ってか婿入りする気だったのか？

「明久、雄二の情報は嘘だ。根本に間違いがあるからな」

「根本？」

「考えてみる？久保って確か学年、現次席だ。そんな頭の良い奴が……………」

雄二を指指して、

「こんなゴリラと知人である訳がないだろう」

「それもそうだね」

「誰がゴリラだ、コラ！！！！」

「はいはい。その人達、静かにしてくださいね」

先生が教卓を叩いて警告された。

「あ、すいませー」

バキィツ　バラバラバラ……………

教卓が崩れて木片になってしまった。腐ってたのか？

「え〜……………替えを用意してきます。少し待っていてください」

足早に先生が教室を出て行く。改めて、現状に溜息が出てくる。

すると、明久が雄二を誘って廊下へと出ていった。一体何を始める気だ？

聞き耳だけでも立てに行こうと思ったが……………

「あの〜、ちょっと良いですか？」

姫路に呼び止められた。

「何？」

「その、あ、ありがとございしました。保健室まで運んでくださって……………」

「……………その話か？別にいい、成り行き上だったただけだ」

「で、でも。そのせいであなたまで無得点扱いにされてしまいましたし……」

「点数なんてどうでもいい。それに明久と同じクラスになれた方がよかったから」

去年が去年だけに知らない所で死にかけられたら困るし……。

「吉井君と親しいんですか？」

首を傾げながらそんな質問をしてきた。

「……あいつとは小学からの付き合いだし、な」

「小学校、ですか？」

何やら考え込む表情になる姫路だが、――もしかして……

「ねえ？誰だかわからない？もしかして……」

「えっ！？いや、あの、その……ごめんなさい、分かりません」

やっぱりか。そんなに変わったかな？

「ん〜、小学校の頃転校してきて、なんて言えばいいだろう。……

ドラ猫ってわかる？」

「ドラ猫ですか？」

「ああ、いい。解ってない反応だから。……となるとノラとか系は

知らないだろうし……！ニケは？」

「ニケですか？それなら五年ぐらいの運動会で聞いた事が確か……」

「そうそう、オリジナルシャツ作成の時。オレのコードネーム……」

「でもそれは黒井さんだったと……黒井さん、ですか？」

「そうだが？」

「……………エエエエツ〜！！！！？？」

……………叫ばれてしまったが、そこまで変わったかな？

二話目（後書き）

次回、【店】が登場します。しかし、更新は気まぐれなので気長にお待ちください。

アドバイス、訂正、感想をいただけたら嬉しいです。

三話目（前書き）

気がついたらユニークというのが1000を越えていました。ありがとうございます。

……ちょっと暴走しましたが少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

三話目

ああ、今回はそういう事か……。

姫路とのやり取りをやっている内に先生が戻ってきて、いつの間にか明久達も席に座っていた。

明久にこっそり何をしていたか聞いても……

『まあ、すぐわかるよ』としか言わない。

そう言われればどうしようもないし、まだ自己紹介が終わっていないので引き下がった。後はまた淡々と自己紹介をしていき、ようやく終わりが見えてきた……その時、

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

コウが先生に呼ばれ席を立ち、教壇に向かうその姿は去年からよく見るふざけた雰囲気ではなく……、

「坂本君はFクラスのクラス代表でしたよね？」

代表らしい貫禄を見せているように見えるが、間違いない。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

奴がクラス全体を見るのは様々なことを計算し始めた顔であり、

「さて、皆に一つ聞きたい」

間を取って、全員を自分に集中させる策略はかつての異名を彷彿させる。

注意が自分に集まったのを感じ取ってから、視線をゆっくり動かす

……、

かび臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れたちゃぶ台

と環境の悪さの代表格へと誘導するは、手品師を思わせる。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが――不満はないか？」

「大ありじゃああつ！！！！！」

教室全体に魂の叫びをさせるはどこかの指導者のようで……、

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

「そつだそつだ！」

「いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！改善を要求する！」

「そもそもAクラスだって同じ学費だろ？あまりに差が大きすぎる！」

次々あがる、自業自得を無視した不満の声

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

そんな同意の声を聞き、ニタリつと笑う表情は、獲物を見つけたケダモノのものだが……、

「これは代表としての提案だが――FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

何かを見つめる眼は周囲すら巻き込む悪ガキのものであった。

視線、吉井明久

え〜つと、どうも。吉井明久です。今、僕は先生が教室からいなくなつてから、クラス代表の雄二を誘つて廊下に出てきました。

今ならホームルーム中だから人の気配はなく、安心して話をするこ

とができる。

「んで、話って?」

「この教室についてなんだけど……酷いもんだと思わない?」

「Fクラスか。想像以上に酷いもんだな」

「雄二もそう思うよね?」

「もちろんだ」

「Aクラスの設備は見た?」

「ああ。凄かったな。あんな教室見たことがない」

そりゃそうだろうね。遅刻しかけて横目で見てきただけだったけど、あのバカでかい教室の上に、壁を覆い隠すような大きさのプラズマディスプレイ、さらにノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシート等等エトセトラ。

え?横目にしては詳しすぎないかって?……まあ、ちよつと、ほんとはちよーつとだけ足を止めて覗いていたけど……。

ともかく!!AとFの格差は計り知れない。月とすっぴんぐらいだ!!(注意、正しくは月とすっぽん、です)

「そこで提案。せつかく二年になったんだし、試召戦争をやってみない?」

「戦争、だと?」

「うん。しかもAクラス相手に」

「……何が目的だ」

雄二が警戒するような目で見てくる。

……なんて言おう。流石に僕やこいつ、多数の男子は自業自得だと思っけど、リンや姫路さん達にはもう少し救いがあったもいと思っってという理由は恥ずかしいし……、

「……学校って社会の縮図だろ?それなのに、こんな差別を受けるのはおかしいじゃないか!?でも、今の僕達が言ってもやつかみにしか聞こえない。だから、一番上に立って、それから権利の主張を
ー」

「つまり、姫路や鈴達のためになんとかしてやりたいと」

「人がせつかく考えた言い訳を流すな!!」

「…カマをかけたらすぐに引つ掛かった」

しまった!ハメられた!

警戒を解いたが、代わりにニタニタとこちらを見て笑っていた。

「……ああそうだよ!!リンに言われて思い浮かんだんだ。悪い
か!!?ノノノ」

火が出るほど顔が熱いが、知ったこつちやない。代表である雄二を
動かさないとこれはできないんだから、もう正直に言ってやるぞ。

「まったく、お前は相変わらずのバカだな」

「うるさい!!で、どうなの?Aは無理でもB…はきついからC…

…イヤ、駄目ならD…:百歩譲ってEでもいいからやらない?」

「オイオイ、どんどん下がっていつてるぞ?」

だって、あのFクラスでのやり取りを聞いていれば、どれだけバカ
の集まりかわかるっての。

「安心しろ。どのみち、戦争はやる気だった。しかも、Aクラス相
手にな」

「えっ?なんでさ?」

「……世の中、学力だけが全てじゃないって証明したくてな」

……何をしたいのかはよくわからないけど、何かを思い詰めるよう
な雄二がいた。

「…それに、いい作戦も思いついたしな。先生が戻ってきたな。俺
らも戻るぞ」

「あ、うん」

雄二に言われて教室に戻る。……けど、何だろう。何かいやいな力
ンを感じるんだけど。

〈視線、黒井小鈴〉

『バカか？Aクラス相手に勝てるわけねえ！』

『これ以上、酷い設備はごめんだ！』

『姫路さんがいれば、何もいらない！』

教室内が喧々囂々になってしまったが無理もない。

Fの基本戦闘力になるテストの平均は、高く見ても900。対し、Aの平均は低く見ても2000。と、二、三人で囲んでも返り討ち。相手によつては五人相手でも返り討ちにできる相手なのだから。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

『何をバカなことを』

『一体、なんの根拠があつてそんな事を言つんだ！』

『姫路さん、大好きです』

明らかに話に関係ない輩がいるが、それは無視しながら不満が出尽くすのを待ち、口を開いた。

「……いいだろう。ならば、根拠を話してやる。おい、康太。姫路のスカートを覗いてないで前にこい」

「……！！（ブンブンブン）」

「は、はわー！！」

必至に顔と手を横に振つて、否定の態度を取っているが……頬の畳の跡もだが鼻血を隠せてないし。

「土屋康太。こいつがあのお有名なムツリーニだ」

「……！！（ブンブンブン！！）」

『ムツリーニだと……？』

『バカな、ヤツがそうだといいのか……？』

『だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ……』

『ああ。ムツリーの名に恥じない姿だ……』

その名自体が恥だろう。

「?????」

姫路はその意味が解つてないみたいだが、わざわざ教えるものでもない。

「姫路のことは説明する必要も無いだろう。皆だつてその力は良く知っているはずだ」

「えっ？わ、私ですか」

「ああ。ウチの主戦力だ期待している」

このクラスどころか、学年でも五指に入る実力は、戦争では無敵の札となるだろう。

『そうだ。俺達には姫路さんがいるんだつた』

『彼女ならAクラスにも引けはとらない』

彼女だけ、な。

『ああ。彼女さえいれば何もいらぬ』

誰か知らないけど、明らかに脈は0だし、前の明久がもう墮として
いる、諦めるのを勧めする。

「木下秀吉だつている」

『おお……！』

『ああ。アイツは確か、木下優子の……』

秀吉は学力ではFだが、演劇部のホープとして有名である。

「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだがやってくれそうな奴だ』

『坂本つて、小学校の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だつたのか』

『実力はAクラスレベルが二人もいるのか！』

いや、Aはないだろ。去年、授業すらまともに聞いてすらいなかつたし。

…まあ、テンションを潰すから言わないでおくけど。

「さらに、気づいている者もいるだろう。黒井小鈴が何者かに……」
ほぼ暴走を始めてる面々を客観視していたら名を上げられてしまつた。

「そう。奴は、なんでも屋・【黒い子、鈴の卓球便】の店主だ！」

「ちよつと待てえ！誰だ、その名前をつけたのは！？」

なんか知らんが変なことに。品物の依頼なんかにすぐ対応（返球）、
つて意味で卓球便は名乗っているが頭についてるのはなんだ？しか
も、某クロネコのリズムみたく語呂が良いし。

『やはり、奴がそうなのか』

『鉄人すら脅している黒い子がいると聞いたが……』

『色んな情報も集めて、裏から学園を操っていると俺は聞いたが』

それもさらに待て。西さんはしつかりと事前にチェックを通してあ
るから何も言わないようになっただけだし、情報集めは品物の流行
予想と師匠の頼みだけだ！！

『黒い子、鈴がついているウチが負けると思うか？』

『勝手にオレにそんな役を付けんな！！否定させる！』

しかし、誰も話なんぞ聞いてくれず、暴走が止まらない。

『それに、吉井明久だっている』

……シンー

あつ、止まった。

「ちよつと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！全くそんな
必要はないよね！」

『誰だよ、吉井明久つて』

『聞いた事ないぞ』

あゝれ？忘れてる？楽になれると思うな、つて身体に刻まないと駄
目かな？（黒）

「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは《観察
処分者》だ」

ああ、ユウ。遺言はそれでいいのね。

「よくも言ったな、雄二！！皆、チガウんだ。それには深い理由が
……つて、リン！？どこからそんなでかい、先が斧みたいな槍を取
り出したの！？」

「ん？明久。これは戦斧つて言つて、そこのゴリラを開きにするも

のだ」

特殊な収納法で仕舞ってあった相棒を取り出し、ユウ目掛けて振り下ろす体勢になる。

「あ、明久！助ける！！試召戦争が出来なくなるぞ！！」

ああ、その時は代わりの代表を選抜する。だから……永久に寝てな。

「……お休み、ユウー」

「リン、ごめん！！」

別れを言おうと思ったたら明久が飛び掛かってくる。しかし、後は振り下ろすだけだから止められや……、（ストンツ）えっ？

「ほくら、リン。落ち着いて」

「ちよ……あき、ひさ……それは……ナシ……」

膝から崩れ落ちるように力が抜け、何も出来なくなる。

明久が何をしてきたかという……頭を撫でてるだけ。何故か知らないが明久に撫でられると力が抜けてしまふ。

「……ヒサ……ヤメ……。ユウを……ヤレない……」

「雄二のはいつもの事だからいいよ。じゃないと……」

「~~~~~！！！！」

明久が次にやったのは、空いていたもう片方の手をあごに持つてきて、喉の辺りをくすぐり、合わせて猫のようなあやし方であるが、力がどんどん抜けていく！！ヤメテ！！周囲がこっち見てるから！！

「………なんじゃこりゃ」

それは私が言いたいわあ！！！！

声にならない叫びの代わりに、小鈴の首からリンツと鈴の音が響いた。

三話目（後書き）

…… ははは。暴走です。

男娘^{オトメ}感を出したかったんですか……。おまけに【店】が気分、さらりだけに……。

感想、訂正、アドバイスをいただけたら嬉しいです。

四話目（前書き）

更新しました。

…なんか謎が増えてしまった。

皆さんが楽しんでいただけたら幸いです。

四話目

「~~~~~ノノノ」

「すいません。今は恥ずかしくって何もしたくないです。」

「明久のせいで、思いつきり恥をかかされて、絶賛、隅で顔を隠すので手一杯です。」

「あゝ、コホン。ともかく、俺達にはこれだけの勝てる要素と、俺の頭には勝つための作戦が来ている。…勝てないと思うか？」

『ウオオオオツ~~~~!!!!』

「俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う。…皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ!!!!』

「ならば全員ペンを執れ！出陣の準備だ！」

『おおーっ!!!!』

「俺達に必要なのはちゃぶ台ではない！Aクラスのシステムデスクだ！」

『うおおーっ!!!!』

「お、おー……」

「クラスのハイテンションに圧されて、小さく姫路も拳を作っていた。」

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

「……下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思っ行ってみる」

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

「そんな堂々とした言葉を言う雄二。横目で明久を見れば、その言葉を信じようか考え込んでいるようだ。」

しかし、ユウが誰かと言えば呼吸するのと同等に嘘と騙しができる
外道である。つまり、使者が死者に逝くようなものだ。

「大丈夫、俺を信じる。俺は友人を騙すような真似はしない」

「…わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」

…また、騙されてる。

「ああ、頼んだぞ」

クラスから歓声と拍手をされながら明久はDクラスへと向かった。
ヤレヤレ。いい加減、学習すればいいのに。

まあ、最初は学習と前回の羞恥（ノノ）の仕返しに見逃すけど……

「という訳で、アイツはバカだから危険になったらアイツを盾に逃
げるように。さて、次にだがりギャベー!!」

『さ、坂本!!?』

『敵襲だ! 狙撃されたぞ!!』

『見ろ! 坂本の両目が…五円玉になってる!!』

『一体、誰が……』

「アレ? そういえば鈴は?」

「んむつ? いないぞ?」

「さっきまでそこにいましたよね?」

「……鈴なら明久を追ってた」

……ユウ、死んどけ。

ユウを狙撃した後、廊下に出て、新校舎側にあるDクラスへ向かう
ため渡り廊下に向かう。流石にホームルームも終わり始めたので何
人が生徒と擦れ違った。

「……あ、スズ! ちょっと、スズ!!」

もう少しで渡り廊下に足を踏み入れるところで後ろから声がかけら
れた。

「…ヒロミ?」

「おはよう! 元気だった?」

声をかけてきたのは少し日焼けになった健康的な肌。ヘアバンドを
つけた少女、中林宏美。テニス部の中心的存在であり、【店】を担

う店員の一人をやってもらっている。

「ハイ。いつもの依頼、部活とかのもまとめてあるから」

「エッ？」

「あれ、品表を回収しに来たんじゃないの？そういえば、あんたはクラスどこ？私はEだったけど代表よ？やっぱC？意外にBとか？」

あ、旧校舎にしているのはE、Fの品表を回収しに来たと勘違いされているのか。とようやく納得がいった。

「いや、オレはFだった」

「……ハアツ！？アンタがF！？」

「そつ。悪いがそれでちよつと用があるからまた後でー」

「イイイイヤヤヤヤアアア！！！！」

さつさと新校舎に行きたかったので、強引に話を断ち切って再び渡り廊下に足を踏み入れようとしたが、向こうから叫び声。…しかも、知っている声の叫びが聞こえてきた。

目を凝らして見てみれば誰かがこちらへ走ってくる。その背後には7〜8人程の男女が追いかけてきていた。

「アレ？あれってアンタがいつも言ってた吉井じゃ……って、スズ？目が据わってるわよ？」

目が据わってる？そりゃそうだ。こっちに走ってきている明久の制服がちぎれていたり、刃物に切られたようになってたり、全身がボロボロにされているのだから……。

「スズ？背中に手を入れて…何、その手の平サイズの筒？（カシヤガチャカシヤン）えっ、伸びた！？武器！？槍よね、それ！？」

惜しい。前回も出したけど槍じゃなくて戦斧。今の相棒《虎咆》。小さく、折りたたみ可能な代わりに、軽くて破壊力は低いけど…。

『待ちやがれ、Fクラスのくずが！！』

『面倒ごとを持ってきやがって！！』

『ボコされて果てるーオオオオオオッ！！？』

「ハアツハアツ……リン？」

渡り廊下から旧校舎側。つまり、後一步で旧校舎であり、虎咆を持つオレの間合いに入らないギリギリ。

そこで戦斧の切っ先を鼻先につけられる事ようやくDクラスの面々が立ち止まった。……後一步だったのに。

「どうも、Dクラスの皆さん。悪いことは言わないからそこから一步でも旧校舎の境界を越えないことをお勧めしとく」、「半ば、そこが我慢の限界ラインだから

「な、なんだよお前！俺らはそのFクラスのカス代表に用があるんだ！！」

「そうだ！下位勢力の分際で、身の程を教えてやるんで、邪魔するな！」

「ソイツをボコボコにしないと気がすまないんだよ！！」
「邪魔するならあなたも容赦しないわよ！？」

カス代表。分際。身の程。ボコボコ。容赦しない？…本当に後一步踏み込んでくれないかな……。

「あゝ、そのDクラスの人達。今すぐ引いたほうが良いわよ？」
「ああん？誰だ？」

「あれ、中林さん？」
「…あんたら、これが誰か知っててケンカ売ってる？」

「誰って……なんか、青筋うかんでいないか、アイツ？」
「…浮かんでるな、白髪の中にはっちりと……白髪？」

「なあ、あれってまさか……」
「そつ。玄関先でよく起こる人山を作るく白光の黒子よ？」

あゝ、また妙なネームが付けられているんだ。どうでもいいけど。
「改めまして。カスのFクラス、黒子こと黒井小鈴と言います。ちなみに趣味で卓球便も経営中ですが……」

「なっ！？Fクラス！！？」
「おまけに卓球便って何でも屋の！？」

ああ、それだけで店の事をわかってもらえるようになったのは嬉しいけど……。

「しばらくDクラスは休業させてもらいますか」

『『『『ナニイイ!!!!』』』』

うるさいな。やるうと思えば骨の2桁ぐらいは逝けるのにそっちの方が好みかな？

「リン。ストップ」

虎咆に力を入れようかと思った瞬間に息がようやく整った明久がそう言ってきた。

「僕なら大丈夫だから。ホラ、ね？戻ろう？」

「……ハアっ、わかったよ」

さっきまで頭の中が真っ黒になっていたのが一気に冷めて落ち着いてしまった。

「それじゃ、今日の午後から開戦、ということだ」

「……ついでにそっちのタマちゃんにしばらく販売は休みって伝言、よろしく」

立ち尽くしている面々は無視し、明久と共にFクラスに戻ることにした。

「雄二!!何が騙すような真似はしないで!!このゴリラ野ろうー

ー雄二?パンダ目になってもキモいだけだよ?」

「気色悪いゴリラとメガネザルの合成獣にしか見えないな」

Fクラスに戻ってきて最初に見たのは仁王立ちでこちらを睨んでいる坂本代表だった。……目が青タンでパンダになっていたが。

「……言いたいことはそれだけか!!テメエのおかげだろうが!!!!」

そう言っておれに指指しをしてきたが……ああそつえば、

「五円玉二枚、返して」

「言うことはそれだけか!!……勘弁ならねえ。女とはもう思わねえ」

そう言つて拳を鳴らしながらこちらに向かつてくる。目玉をぶつ飛ばされなかつただけいいと思えよ。

「黒髪さんに頼まれてたく雄二くん、人形。等身大>の発注でもしよつかない」

「よし、今からミーティングを行うぞ」
分ければいい。

「吉井君、大丈夫ですか？」

「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷」

「吉井、本当に大丈夫？」

いつの間にか姫路とミナが明久を心配していたが、これといったケガはないはずだ。

「鈴、主も大丈夫だったか？」

「ん？ああ、虎咆を出して脅したら止まってくれたからな。…イヤ、一人二人戦闘不能にした方がよかつたか？」

「よくない」

「……過激過ぎ」

そこまで過激かな？正当防衛ぐらいになると思うが。……そういえば、

「忘れてた。ハイ、ムッチー。契約違反のカメラの半分」

「……！！」

すっかり忘れてた。カバンに入れていた、朝回収したカメラの半分を手渡した。

ムッチーはカメラを手渡されると膝から崩れ落ちていった。

「去年も言ったよね？女子更衣室等を見ることが可能なセットをされたカメラ、ローアングルを撮る目的と思われる位置のカメラは回収して、半分戴くつて。あつ！ムッチー以外のもあつたからそれ対策は頼むな」

「……（コクッ）」

「ああつ！もうダメ！死にそう！」

ムッチーに依頼をしていたら、また明久が暴走してる。大方、ミナ

が照れ隠しに『なら、殴つても大丈夫ね』とか言つたんだらう。

「明久、落ち着け。それと、ユウにミーティングは行けないって伝えといて」

「えっ、なんで？」

「ミセの方で用事があるから。それじゃよろしく」

「あ、うん」

明久にそう言つて教室を出ていく。

しかし、用はミセと言つても卓球便ではない。

手元に視線を移し、携帯の画面を見る。

「『旧校舎の2階の空き教室で影をよく見かける』か。噂の真実が見間違いか大人しい（・・・）といいけど……無理だらうな」
なにせ、此処には召喚獣システム（・・・）があるのだから。

師匠に任されたのに思わず溜息が出る。

しかし、誰かが小鈴の顔を見る事ができたなら、その唇の端が上がっているのを見ただらう……。

四話目（後書き）

ようやく次回から戦争に入れそうです。

中々話のテンポが一定しません……。

訂正、アドバイス、感想をいただけたら嬉しいです。

五話目（前書き）

更新です。

なんか明久がレベルアップ？ディープダウン？をさせてしまいました
たが……まあいいでしょう。
楽しんでいただけたら幸いです。

五話目

《バカテスト、国語》

【第二問】

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『(1) 得意なことでも失敗してしまうこと』
- 『(2) 悪いことがあつた上に更に悪いことが起きるたとえ』

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法も筆の誤り』
- 『(2) 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

- 『(1) 弘法の川流れ』
- 『(2) 見つかり没収(涙)』

教師のコメント

シユールな光景ですね。しかし、(2)はどういうことでしょうか。

黒井小鈴の答え

- 『(1) 河童のタケルが足つって溺れて流される』
- 『(2) 泣いてるモモを蜂が刺す』

教師のコメント

場面は合っています。ことわざを書いてください。そして、タケルとモモって誰ですか。

吉井明久の答え

- 『(1) リンの勘定計算ミス』
- 『(2) 泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

黒井さんも人間ですので失敗はします。そして、君は鬼ですか。

「それでは、回復試験を始めます。準備はよろしいですか？」
「はい」

今オレは姫路と共に高橋先生担当の下、回復試験を受けている。なぜなら、振り分け試験を途中退席した者は、途中受けた教科すら全て零点にされる。……時間返せって言いたいよ。

つまり、今のオレらは召喚した瞬間に戦死となってしまう、西さんによる【戦死者、補習フルコースツアー】に強制連行されてしまう。経験者曰く、『……あれは補習じゃなく、洗脳だ。教育じゃなく、調教……アアアアアアアアツ！！ヤメテくれ！！オレ、ハニンゲンダ、トラニハナレナイ！！オレはトラじゃないんだ！！！！』と暴れ出したとか。……ナニコレ。西さん、何をやってんのさ。かなり怖いんですけど。

「黒井さん。試験に集中してください」
「失礼」

今は負けた事を考える時じゃなかったな。目の前の問題をさっさと解かないと。一問の正解が召喚獣のHPやら攻撃力やら……どちらかと言えばレベルに近い物になるんだし。

しかし、そう考えると振り分け試験が終わってすぐのこの試召戦争は、全体的に得点が上なDクラスが勝つに違いないって数字上は思っただろうな。

けど、これは学力だけの勝負じゃなく、学力を利用した戦争だから、十分勝つ手段に策略はある。

……明久なら気づくだろう。

< DクラスVS Fクラス、前線 >

「む。総員、戦死する前に退くのじゃ！防御に集中するのじゃ！」

『塚本！Fクラスの前線、撤退していくぞ！』

『そりゃそーだ。Fクラスのバカどもに俺らが負ける訳がねえ！』

『おらあ！！Fクラス一人撃破！！』

新校舎側の渡り廊下、入口で戦争の前線が行われていた。しかし、点数の差が戦線に見え始めていた。

「さあ来い！この負け犬が！」

『て、鉄人！？嫌だ！補習室は嫌なんだっ！』

「黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるかわからんが、たっぷり指導してやるからな」

『た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない！』

「拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやるう」

『お、鬼だ！誰か、助けっ……イヤアア……（バタン、ガチャ）』

まるで死臭を嗅ぎ付けたハゲ鷲のごとくに鉄人が表れ、戦死になった男子生徒を片手で持ち上げ、補習室へと連行した。

『お、おっかねえ……』

『だが見る。Fクラスの奴ら怖じけづいたみたいに引いてくぜ？』

確かにFクラスの面々はどんどんと退いていき、後ろの方は旧校舎側に着きそうだった。……まるで誘い込むように。

『さあ、Fクラスをさっさと潰すぞ!』

『!待て!一人で突っ込み過ぎだ!』

先程Fクラスの一人を補習室送りにした生徒がさらに、と退いていくFクラスを追っていった。

『塚本?何焦つてんだ。相手は格下だよ?多少先行しても簡単にやられや……』

『ぎゃあああああ!?!?!?!』

『?!?!?!』

「戦死者は補習!?!」

再び現れた鉄人が戦死者:先程、独断先行をした生徒を担ぎ出していた。

『なっ!?山本!?!』

『一体、何があつたんだ!?!?』

『見る!?!Fクラスが何かやってるぞ!?!』

旧校舎の入口近くを見れば人数が増えていた。恐らく、増援と合流したのだろう。

しかし、それだけでは戦死させられた理由がわからない。

『『『『『試^{サモン}獣召喚つ!?!』』』』』』

するとFクラスがまだこちらに距離があるのに召喚獣をだしてきた。

「第二陣、放てえ!?!」

Fクラスからの号令が渡り廊下に響き、それと共に、召喚獣達が自分の武器をこちらの召喚獣目掛けて投げてきた。

『なっ!?!全員避ける!?!』

それぞれ飛来物を避けようとした。しかし…、

『うわっ!崎本、邪魔だ!?!』

『こっちも当たるだろうが!?!』

『キヤッ!?!』

互いの召喚がぶつかつたり、壁に邪魔されたりと上手くかわすこと

ができない。

それもそうだろう。まだ、召喚獣の扱いに慣れていない上に、渡り廊下という狭い空間で混雑しているのだから。

しかし、投げられた武器は大工用ハンマーやバット、鉄パイプにのこぎりなどだったが、やはり点差があるのか戦死まではいかなかった。

「第三陣、ようい！」

『奴ら召喚獣を引つ込めたぞ』

『また来るぞ！』

『ーなら、先に攻撃するだけだ！』

そう言えば数人がFクラスに突撃していった。

「島田さん！！須川くん！！」

「OK。島田美波、受けます！！サモン！！」

「同じく、須川亮参加します！サモン！！」

『Fクラス 島田美波 数学 173点 VS Dクラス 渡辺有志 113点』

『！！Bクラス並だと！？』

「数学は得意教科なの」

『だが二、三人がかりでいけば……』

『させつかよ！！』

『Fクラス 須川亮 83点』

『Fクラス、近藤吉宗も行きます！！』

『武藤啓太も参戦します！！』

『同じく、君島博もです！！』

『Fクラス 近藤吉宗 51点』

Fクラス 武藤啓太 63点

Fクラス 君島博 70点

「武藤くんは島田さんの援護！バットで敵の手と武器の根元だけを狙って！須川くん達は三人がかりで！！武器や体勢を崩させるのを重点に！！」

「了解！！」

点数だけを見ればDクラスが勝つだろうが…。だが、戦争は点数だけでなく、人数も重要なのだ。

攻撃をしようにも体勢を崩され、そこを袋叩きにされたり、武器を狙われ、攻撃自体が出来ないで戦死するものもいた。

「皆離れて！第三陣、放てえ！！」

その間に再召喚をした面々の投擲が始められた。Fクラスはすぐに回避行動に出れたが、体勢を崩されているDクラスの召喚獣は無理だった。

Dクラス 野村誠 0点

Dクラス 佐々木正治 0点

Dクラス 樋口 宗太 7点

「戦死者は補習う！！」

「ギヤアア！！」

「た、助けてくれ、塚本！！戦死しちまう！！」

「塚本！！」

「くそお！全員、次が来る前に突撃…」

「ウワアア！階段からもFクラスが来たぞ！！」

Fクラス 鈴木翔 数学 52点

Fクラス 瀬戸雄大 数学 49点

「塚本！挟まれたぞ！？」

『どうする!!?』

『クツ…。全員、撤退だ!! 体勢を立て直す!! 身を守ることだけを考え後ろへ進め!!』

『樋口は!?!』

『無理だ、あきらめろ!!』

『クソツ!! 樋口、すまない!』

個人的な点差はあるため、身を引くのは可能だった。だが、試験召喚戦争ルールによって戦闘を挑まれたのは敵前逃亡のため幾人かは逃げれなかった。

『見る! Dクラスが引いてった』

『どうする、吉井?』

「深追いは危ないよ。相手は格上だし、時間稼ぎはできるから戦力の再確認かな?」

『吉井隊長。こちらの戦死は三名。補給が必要な重症者は木下隊長も含み六名。対し、あちらは戦死、八名。重症者、五名とのことです』

「了解。んじゃ秀吉、回復試験を受けてきて?」

「うむ。…しかし、主の策が当たったの。どうしたのじゃ?」

「ほんと、上相手にここまでの確に……。あんた、頭打った?」

「少しは褒めてくれないの!?! ゲームの応用だよ。相手は嘗めてたから深追いしてきたのを利用しただけだよ……」

「ゲーム?」

「うん。確か、WBCって名前のネットゲームだったかな。それにあつたのを利用したの」

そう答えたらほぼ全員がこちらを見ていた。

「…どうしたの?」

『吉井: WBCって《ワイド・バグ・サイバース》か?』

「あ、それそれ」

ワイド・バグ・サイバース
WBC。ネットゲームでいわゆる《終わらない》ゲーム。レベルがなく、鍛えれば鍛えるほど強いキャラにすることができる。しかし、

パワーだけを鍛えても途中で上がりにくくなり、身体の耐久度を上げると再び上がるなどバランスにも気をつけないといけない。といったように育成もできる。RPGを楽しむもよし、ユーザーやノンプレイヤーの仲間を集めるのもよし。そして、偶然できたバグが作り上げたとも言われるほど多彩な利用法があるゲームとして有名である。

「へえ〜吉井もやってんのか？」

「俺、この間レイカを仲間にできたぜ！」

「でも次の日に離れていったんだろ？」

「俺はギラザウルスを倒したぜ？」

「ステータスアップのために金魚のふんしたんだっけ？」

「んで、吉井のユーザー名は何なんだ？」

「文明ぶんめいだったかな？」

「『何イツ！！？』『何イツ！！？』」

明久の台詞には一同が反応した。

「ど、どうしたのさ？」

「お前がああ『文明』なのか！？」

「No.1バグキャラ、孫59と【ロングロングファイト】で唯一勝った、伝説持ちの！？」

ロングロングファイトとはあらかじめ決まった戦力で何処まで闘い続けられるか。何処まで領地を広げられるかという国物語を行う物である。

ちなみに勝ったというのは、何故かノンプレイヤーキャラクターの仲間（女の子）が無駄な戦闘はしっかり避けて、戦う時は無双の働きをしてくれて……気がついたら世界征服して、天下大平を達成してたりする。半ば明久はそれについていただけなのだが……

「すげえっ！！そんな奴がいればDクラスなんて屁でもねえ！！！」

「吉井隊長！あんに命預けるぜ！！！」

「ウオオオオオ！！燃えてきたあ！！！」

上がりまくったテンションは下げるべきではないだろう、うん。

「皆、今は奇襲が上手くいっただけ。次は相手も本気で力を入れてくる。本番はこれからだよ」

『オウツ!!!』

「僕らの役目は時間稼ぎ。そのために前線を維持し続ける…誰が犠牲になっても、できるだけ長く、だ」

『……………』

「勝つために姫路さんが来るまで耐え抜く！男の意地を見せれるか！？」

『つたり前だ!!!』

「倒す事は二の次でいい！敵を此処で足踏みさせるのが僕らだ！男の華道、咲かせてみせる!!!」

『オオオオオ!!!』

『Dクラス！攻めてきました!!!』

「全員戦闘準備！必ず勝つぞ!!!」

『ツシャアアア!!!サモン!!!』

そして再び戦線がぶつかり合う！

「…吉井？私は女なんだけど？」

「いや、あれは場の流れっただけで、別に島田さんが男勝りということでは…島田さん、関節はそっちには曲がらな…!？」

「誰が男顔負けですって!!!？」

「そこまで言っただけでいい!!!」

「…なんか明久が墓穴を掘った気がするな。…少し早く行こう。勝負と遊びは全力で、ってね…。」

チリンッ

五話目（後書き）

明久のゲーマー率が深まりました。そして、ゲームでも墮として
いるのか！？

アドバイス、訂正、感想をいただけたら嬉しいです。

六話目（前書き）

ちよっとしたIFをやってみたかっただのですが……島田美波ファンの方、すみません。

こんなタイピングですが更新しました。
楽しんでいただけたら幸いです。

六話目

「先生、すみません。次のをお願いします」

「黒井さん。よろしいんですか？」

「はい。構いません」

なんか嫌なカンが騒いでる。急がないと……。

『隊長！長谷川先生が連れてかれ、教科が五十嵐、布施先生の化学に変わりました！』

「しまった！化学70以上は前へ！他は援護に回って！必ず三人以上で挑んで！！」

「吉井。化学には自信がないの。60点台の常連なのよ」

「…なら、今来た学年主任のところに。化学のフィールドには入らないように注意して」

「了解！」

前線の戦闘はすでに混戦となっていた。

敵が戦力の数を増やしてきたため、点差が徐々にこちらを押しつけていた。今はなんとか相手を狭い入口近くで足止めさせ、多数VS少数の状態で維持はできているがいずれはその包囲も破られるだろう。

「お姉さまあ〜！」

「！美春！！！」

戦場に響くお姉様の声に思わず反応して見てみれば、島田さんがDクラスの女子に捕まっていた。化学のフィールドを抜け出す前に捕まってしまったようだ。

「フツフツ、お姉さまあゝ逃がしませんよあゝ」

「くっ、美春！やるしかないってことね……！！」

「……お姉さまに捨てられて（……………）以来、美春はこの日を一日千秋の想いで待っていました……」

よく通るその声に戦場の音が止まった。

「ちょ、ちよつと！いい加減ウチのことは諦めてよ！」

「……島田さん、お姉様って……」

「嫌です！お姉様はいつまでも美春のお姉様なんです！」

「来ないで！ウチは普通に男が好きなの！」

「嘘です！お姉さまは美春のことを愛しているはずです！」

「このわからずや！」

……… なんだか、島田さんが遠い。

周囲も二人から離れて……というより、引いていつていた。

「行きます、お姉さま！」

「はあああつ！」

「やあああつ！」

二人の気合いと共に召喚獣がぶつかり合う。

島田さんの召喚獣がサーベルを使って切り掛ければ相手の召喚獣が両刃の剣で受け止める。そして鏝ぜり合い、力比べになった……が、

『Fクラス 島田美波 化学 53点 VS Dクラス 清水美春
94点』

召喚獣の頭上に表示された二人の戦闘力が島田さんの不利を示していた。

しかし、島田さん、サバ読んだな。

「島田さん！向こうの方が点数が高い！真正面は無理だ！受け流して！」

「そんなこと言われなくてもわかってるけど、そんな細かい動作はできないのよっ……」

直後、均衡が崩れ、島田さんの召喚獣が弾き返された。体勢を崩している所を相手の清水さんが追撃してくる。

「ここまでですっ!」

「くうっ…まだ!」

体勢を崩しながらもサーベルを振るい、相手を攻撃する、がしかし…

「無駄ですわ!」

それは相手の腕を掠めただけで、そのまま押し倒された。

「さ、お姉さま。勝負はつきましたね?」

刀を喉元に突き付けられる島田さんの召喚獣。さすがに首や心臓といった急所をやられたら即死―補習室行きとなる。

「い、嫌あっ!補習室は嫌あっ!」

「補習室?…フツ」

しかし、どうしたのか。相手はトドメをささずに島田さんの腕を取ると階段の方へと向かっていくようだった。

「…フツ。お姉さま、この時間なら保健室のベッドは空いていますからね?ハフウノノ」

色っぽい溜息と危険な台詞。高揚して顔を朱く染める清水さんとは対照的に島田さんの顔から血の気が引き、青くなっていく。

「よ、吉井、早くフォローを!なんだか今のウチは補習室行きより危険な状況にいる気がするの!」

《明久が助けを求められた。》

選択肢、ようすをみる

じゅもん

どうぐ

にげる

《明久はようすをみた》

シミズがじゅもんをとええた

「……………コロシマスワヨ……………」

《明久のゆうきが20下がった》

《Fクラスの一同が目を逸らした》

《Dクラスの生徒が見なかったことにした》

《シミズからヒカリがきえ、ヤミにおおわれた》

「…島田さん、君のことは忘れない！」

「よしいいいいい！」

つてのは嘘で、恐いけど島田さんはFクラス（ウチ）から見れば上の方。敵はまだ召喚獣を出したまま。油断した隙になんとか……

「ジャマモノノケハイガシマス！」

「嘘っ!？」

野生（×）恋する乙女のカンがこちらの思惑に気づいたようだ。

「くっ、サモン!！」

『Fクラス 吉井明久 化学 38点 VS Dクラス 清水美春

41点』

清水さんが先の戦闘で消耗していたおかげでなんとかなんとか戦えそうだ。……しかし、なんで僕の召喚獣は特攻服に木刀なんだ？

「ヤハリ、オネエサマトミハルノジャマヲスルキデシタネ!！」

「……って、今考えることじゃなかった！」

ヤミに覆われた（なんで!？）清水の召喚獣が急接近してくる。点数以上のスピードで来るが、なんとかかわせた。

「……ジャマモノハクロス、ココロスココロココロスクロス!
!」

「ちょっと待って!なんかいけないスイッチ入ってない!?バーサーカーモード!？」

清水さんがこの世ではないものになりつつある。しかも、周囲の間がヤミで歪んできている!？」

「……吉井」

「！島田さん！？よかつたさん！お願い、てつだ……って……」

背後からかけられた声の主、島田に助けを求めた……が、

「……ウチヲミステタワネ？」

島田さんがヤミに覆われていた。

「シニナサイ、ヨシイアキヒサ！」

「クタバリナサイ、コノブタヤロウ！」

《島田さんがてきになった》

「ちよつ！！？誰か、助けてください！！！」

《明久はたすけをよんだ》

「今だ！前線を突破しろ！」

「吉井隊長がバーサーカーの盾になってくれている。隊長の死を無駄にするな！！！」

《Dクラスは見なかったことにした》

《Fクラスは明久をきりすてた》

「ちよつとおお！！！！！」

「シネエエエエ！！！」

「ケケケケケケケケ！！！」

「しまっ！！！」

ガキンッ！！

「……ギリギリ間に合った」

「リン！！！」

《小鈴がたすけにきた》

……カンが大当たり。急いで来てみたら明久が危険な事になってい
たから割り込んだけど……すっかりツかれてるな。

「……明久。状況を教えて」

「えっと、島田さんと清水さんが保健室でキケンな事になりそうで、
敵を騙すなら味方すら、つて思ったら攻撃されて、怒った二人がヤ
ミになってこんなことに……」

「……了解。理解した」

『『『今のでわかった!?!?』』』』

長年の間柄を甘く見るな。それに、清水とは面識がある。大方、エ
ロいことに持ち込もうとしたのを邪魔されたのと、それを見殺しに
されたと思つて攻撃してきて、ああなつたつて所だな。

「……ヤレヤレ。明久、ミナの方を抑えておいて。なんとかするか
ら」

「頼むよ!絶対!」

「はいはい。遊びと勝負は……全力で楽しむさ」

『Fクラス 吉井明久 化学 化学 38点

Fクラス 黒井小鈴 84点 VS Dクラス だったもの 清水美春 41

点

Fクラス 島田美波(?) 8点』

「リン、いつもより低くない!?!」

「二、三枚やつて、見直しも無しで来たからな……」

それに紙が無駄だからあまりやりたくないんだよなあ。ここのシス
テムだと無駄そのものだし、コンピュータで問題を出せばいいのに。
まあ、急いだ割にはいい方だし……

「やり合えなくはない」

「……バトルジャンキー」

「否定はしない」

「……キシャアアア!?!?!」

そしてとうとう二人が襲い掛かってきた……召喚者自身も含め。

「ええ！？」

「ほっ！」

驚く明久を庇うように前に出て、虎咆を取り出し二人の突撃を食い止める。

「それでいて召喚獣も動かしてらんだから、驚くよ」

清水の方は大振りながらも確実にこちらの召喚獣を攻撃してくる。

ミナの方は明久が羽交い締めになっているがジタバタと抵抗をしている。

……しかし、オレの召喚獣はなんであんな装備なんだ？肩丸出し。

へそ丸出し。胸のビキニは一応鎧？。足元は布で隠せてはいるが切れ目から左足がさらけ出しているし……。武器は槍のように長い戦斧を右手に握り、左手には鉄扇が開かれている。どっちかで良かったんじゃないか？……どう見てもヘンなのになんか、その、懐かしいような、見覚えがあるような？

「まあ、考えても仕方が無い事だな」

二人を突き飛ばして距離を取る。ちよつとばかり血が騒いできたようだ。

『『『あいつ、女だったのか！？』『』『』』

……もう突っ込まん。ってかFクラスからも聞こえたぞ、おい！

「……ネエ、スズ」

「なんだ、正気に戻ったか、ミナ？」

まあ、それはさすがに無いだろうが。

「……ナンデアンタノ召喚獣ニムネがアルノ？」

「……ハイ？」

「ナンデムネガアルノ？アンタ、ウチノテキ、テキキテテキ」

……まずい、血が頭にきて……キテしまいそうだ。

「……落ち着け、ミナ。胸なんて千差万別あって、それぞれに魅力があるもんだって師匠が言って……」

「アナタモオネエサマノペったんヲネラツテイルノデスネ！ワタシマセン！コロシマス！」

.....プチッ

(カシャガシャガシヤン ゴソゴソゴソ)
虎咆を畳んで、背中にしまいながらアレ(・・)を出す。

『『『『ハリセン?』』』』』

「あゝ、出た」

回りは困惑した声をだすが、さすが明久。今のオレの心情に気づいたか。

「『キシャアアアア!』」

そして、再び二人が飛び掛ってくるが……もう、付き合ってもらえるか!!

「……人の話は聞けえ!!!!!!!」

スッパアアン!!

「『きゃんっ!!』」

ハリセン、一閃が二人を直撃し、そのまま廊下に倒れこんだ。二人揃って渦巻きに目を回していたが、ヤミが無くなっていた。
そして……

『Fクラス 島田美波 0点

Dクラス 清水美春 0点』

その間に、二人揃って補習じゆく送り。

「西さん!お願いします!!」

「先生と呼ばんか、まったく」

そう言つて二人を俵のように担いで連行していく。

「はっ!おのれ、黒井小鈴!次こそお姉さまのためにそのクビをさ
さげてやる!!」

「鈴のばかあ!!」

……疲れる。

「……さて、次は誰が相手だ？」

「うっ……」

オレがDクラスの方を見ると相手は一步下がった。

「総員、攻め立てろ！」

「お、おう！！」

攻め込むには好機と思い、号令を出す。止まっていた戦闘が再開される。……オレも参加したいが、気力がまだ戻らない。

「……リン、お疲れ」

明久が頭をポンポンツ叩いてくるがそれに若干癒される私。そのリズムに合わせて、首元で鈴がリンツリンツと鳴り響く。

六話目（後書き）

早く戦闘をさせたいと思ったのですが…こうなりました。
アドバイス、訂正、感想をいただけたら嬉しいです。

七話目（前書き）

リアル
現実を苦勞した方。楽しんだ方。更新しました。
またも少し謎を出してしまいました。

PVが一万をかなり昔に超えていました。見て頂き感謝します。

七話目

「遅い！」
『くっ！』

『Fクラス 黒井小鈴 総合科目 757点 VS Dクラス 長谷部藤次 1131点』

敵の召喚獣が斧を振りかざしてくるのを戦斧の柄で受け流し、鉄扇でももいつきり殴りつける。致命傷にはならないが間合いを空けることは出来た。

『くらえっ！』
『もらった！』

今度は2体の召喚獣が左右から挟みこむように襲い掛かってくるが、

「ふっ！」

『！？』

『何！？』

戦斧で床を叩きながら反動を使い、召喚獣を宙に舞わせる。挟み込むといつても突撃といった単純操作しかできないため避けるのは容易。召喚獣同士がぶつかり合い、互いの武器や衝撃で点数が減っていく。

「ハアアアアア！！」

『

Dクラス 田中学 0点

Dクラス 柳川桜 0点』

そこに上から追撃をし、相手は戦死となった。

「ーさあ、次は誰？」

『な、なんであいつ、あんなに召喚獣の扱いが上手いんだ！？』

似た（・・・）ようなものを使った事があるからな。例えばラジコンと人形操りの違いぐらいか？

『おい！もう二、三人こっちに来い！』

何人かが集まってきて物量で押し潰しにくるが、小鈴にはそれは好都合だった。

何せ、操作で勝ってこそいるが、点数自体は相手を下回っているため一撃で倒せるだけの威力がない。

混戦を利用し、相手を盾にしたり、障害物にしたりしてかわし、相手の攻撃の合間を縫ってヒット&アウエーを繰り返して自分の点数を下げないようにしている。敵を倒すのは完全に二の次だ。

もし、一人一人の連戦だったら、（多分）簡単には負けないが精神的な負担と味方の被害が拡大するだろう。

だから、敵が集まり、より混戦になればなるほど助かる。……しかし、

『吉井隊長！横溝がやられた！これで布施先生側は残り二人だ！』

『五十嵐先生側の通路だが、現在俺一人しかない！援軍を頼む！』

『藤堂の召喚獣がやられそうだ！助けてやってくれ！』

それでも、状況の劣勢化を知らせる声が響く。向こうは援軍を呼んだことで確実にこちらを押ししてくる。対し、こちらは作戦に必要な戦力保持で援軍が来ない。

今の叫びもあって相手の士気はさらに上がっていく。ここは……無理矢理でも戦機を崩す！

「明久！」

「ハア、わかったよ。イーFクラス、吉井明久」

「同じく、黒井小鈴」

「Dクラス、5名に化学勝負を挑みます！」

『なっ！！！？』『』『』『』

『Fクラス 黒井小鈴 化学 62点
Fクラス 吉井明久 化学 23点 VS
Dクラス×5 化学 平均106点』

『はっ！さすがに調子に乗りすぎだ！』

『操作の上手い黒井は後にして、そつちのザコを片すぞ！』

そう言つて、二体の召喚獣がこちらの足止めに残り、三体は明久に襲い掛かる。でも…、

「よっ！」

『『『ハアツ！？』』』

明久の方が、より操作が上手いんだ。それこそ手足のように動かせる。

明久の召喚獣は襲い掛かる相手の召喚獣を跳び箱みたいにして回避した。

『な、なんでそんな操作ができんのよ！？』

再び襲い掛かる攻撃を床に伏せてかわし、打ち下ろされるこん棒の一撃は転がるようにして避ける。敵がナイフを投げてくれば木刀で受け止める。

一方的防戦だが未だにかすり傷すら負わず、点数が減っていない。

『何やってんだ！早くしやがれ！』

『うるさい！わかつてるわよ！』

こつちを足止めしているのがそれを見て仲間に罵声を浴びせ掛ける。点数が低いのにトドメをさせず、ましてや攻撃を跳んでかわしたと同時に、召喚獣を足場にして地味に点数が減らされる。

壁に追い詰めたと思つたら召喚獣の股下を通つて逃げ、投擲したナイフが腰の動きだけでかわされる。

最早、悪夢を見せられているようだ。そして、――見すぎだ。

『つこの、いい加減くたばりやがれ！』

『往生際が悪いわよ！』

「そつそう、諦めはきつぱりとしたら？」

『そつだ！いい加減やられ……』
会話に紛れ込んだ違和感に言葉が止まった。

『く、黒井！？遊佐と渡は！？』
先程まで足止めをしていた場所を見れば西村先生に連行されている二人の姿があつた。

「点差があつても、よそ見はダメだよ？じゃないとー」

『Dクラス 黒沢和樹 化学 0点』

「戦場じゃ戦死ぬよ？」

「戦死者は補習！」

『ギヤアアアア！！』 「あと、2！」

ここまででも十分崩したが、駄目押しが必要だ

『クツ、こうなつたら……』

『一人でも道連れに！』

そんなこちらの異常性に、相手は覚悟を決めたようので、特攻をしてくる。

…正直、その判断は間違っていない。連戦でこっちの召喚獣は操作が甘くなりつつあり、明久の召喚獣は一撃でも喰らえば間違いないで戦死する。二人じゃなければ成功していただろう。

「よっ！」

「はっ！」

明久の召喚獣が木刀を相手の足元に投げ込む。それによつてすきだらけの体勢を見せることになり……、

「ラスト、1！」

後から投げた戦斧に喉を切り裂かれ、戦死となる。もう一人は体勢を立て直しが出来てなく、絶望的である。……だから、決まつたと思つた。

『くく、クソオオオオ！』

ちよつとした余裕で油断。

七話目（後書き）

戦闘表現は難しいですね。次は地獄の補習室からお送りします（！？）

アドバイス、訂正、感想をいただけたら嬉しいです。

八話目（前書き）

遅れながら、タイラントさんから感想を頂きました。ありがとうございます。

今回、勝手にあるキャラの誕生日を設定してしまいました。

――鬼の補習室。小鈴は無事なのか!?

長くなりましたが、少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

八話目

「―そいつは今にも涙を流しそうな顔をして、【私】を見ていた。何の親しみもない。何も感じない。ただ、知っていただけの存在。そんな奴が【私】にそんな表情を向けてくる。」

(……………い……………)

奴も【私】の事は知っている程度。親しみはないだろう。なのにそんな顔をしてくるのが印象に残った。

(……………ろ……………！……………)

周りは【私】を恐怖で見る。異物として扱う。危険物として見る。…なんとも思わなくなった【私】を何故、見る。何故、話かける。…何故お前は、血まみれになっても【私】に笑いかけてくれる。

「起きんか、黒井!!」

「…ガッ!」

石と石が衝突する音と西さんの声で夢から目が覚めた。

しかし、頭に広がる鈍い痛みを頭を抱え込むことしか今はできない。

「…黒井、どんな石頭だ、お前の頭は?」

脇から聞こえる西さんの言葉に反応をして、見てみれば右手を振るって痛みを誤魔化す西さんの姿があった。

「……………体罰は訴えられますよ?」

「痛みも知らんでまともな大人にできるか」

それには同感だが、西さん以外の人はそれを免罪符に使うから気をつけてほしい。

西さんなしでまともな学園生活を送れるとは思えないし、西さんほどまともな大人は見たことがない。……………あの時、西さんがいたら、

アレを解決できたのかな……………。

「……………あゝ寝てましたか。すみません。ちょっと悪夢を見ました。ありがとうございます」

「……………よく補習中に寝れるものだ」

一応、謝罪と礼を言っておくが、それを西さんが呆れた顔で見ている。『あの』地獄送りになってしまい、補習室で強制を強いられているが…意外にそんな大変ではない。内容の密度と量にはきつい物があるが、その他は普通の補習で、噂にあった…洗脳道具が置かれている。

催眠術をかけられる。

鉄の鬼がいる。

間違つと石畳の代わりに二宮金次郎を背負わされる。(正解すれば
ゴールデンきんじ君がもらえる)

DEAD or DEAD H

という話だったがまつたく間違つたものだった。

……………それと、驚く事に、西さんの教え方が上手いこと、上手いこと。今まで理解できなかった所も分かりやすいし、こういった点を間違いやすいつてのもしっかり教えてくれる。

『ーウケ、ウケ、ウケケケケケ』

『ココココケツ！ココココ』

『……………(死んだ魚の目)』

「……………お姉さま。美春は疲れてしまいましたわ。でも、美春は、最期に、お姉さまの姿を見て……………しあわ…せ……………」

「うう、あり・おり・はべり・いまそかり(いますがり)って何よ？ 蟻・居り・侍り・今疎開ってどんな地獄図よ……………」

……………後は、環境さえまともならなあ。

「お前は平然としてるな」

「？ 普通じゃないですか？」

このぐらいで死んだ魚の目になってたら知り合いと付き合うだけで病んでしまう。

「そういうことじゃない。…お前がこんな面倒ごと（補習）を受けているのが意外なんだ」

「……ああ、そういう事ですか？」

確かにオレは面倒ごとはゴメンだと思っっている。テストも中ぐらいの成績を収めていればいいし、平和である方が好ましい。別に今の状況に不満があるわけでもないからな。理由なしに戦闘はしたくないから、いつもなら適当に誤魔化すなりしていただろう。

「まあ、あいつが求めるからですかね」

「吉井か？」

「ええ」

（戦争開始前）

「明久」

回復試験を受けに行く前に、戦闘が始まる前に、明久に質問があった。

「あーリン！これから試験を受けに行くの？」

「ああ。その前にお前に質問してきたくてな」

「質問？」

「………なんのためには聞かん。単純、お人よしのお前の事だから想像がつく」

「うわ、ちよつとひど」

「………聞きたいのは覚悟があるか、それだけだ」

「………覚悟？」

「そう」

背中から虎咆を取り出し、畳んだまま明久の方に刃先を突き付ける。
「誰かのために何かする。良いことだ。けど、これは仮にも【戦争】。何かがあるか、お前の場合はわからない。負ければ何が待つかかわらない。さらに、勝っても何が起こるかわからないってこと」

「……………」
「戦争で誰かに拳を向ける。刃を向ける。その結果、誰かに恨まれる覚悟はあるか？」

戦死させられ、恨むかもしれない。戦争に負けて恨むかもしれない。何かを獲得する者がいれば、何かを損失する者がいる。勝者と敗者は表裏一体。

「……………」
「どうなんだ、明久」

「……………」
「……ない、かな。というより、わからないよ」

明久がどう言えはいいのか言葉を考えながら出していく。

「誰かのためにとってより、僕が気に入らないからやりたいんだし。危ないのはしたくないよ？痛い嫌いだもん」

「……………」
「それに覚悟とか言われても、知らない奴らに恨まれるとか言われても困るよ。それにさー」

明久は突き付けられた刃をよそに、苦笑しながら言う。

「……そんなの気にしてたら遊びすらできない？」

「……………」
「フツ、フッフアハハハハ！」

……まさか戦争の話で、遊びとか言い換えされるとは思わなかった。

「なんで笑うのさ！」

「笑うに決まってるだろ。お前のバカは筋金入りだな」

「雄二よりはマシだ！！」

「……よし、Aクラスまで何とかするんだろ？」

「当然！」

「んじゃ、オレも全力で遊んでやる」

「うん、お願い」

虎咆を引っ込め、明久と別れた……………。

「……なのに、油断して戦死って……ちょっと死にたいかも」
「待て、黒井。カッターを何処から取り出した？」
「離してください、西さん！オレには喉を裂くって罰が必要なんです！」

「それは罰じゃない！自殺だ！そんなになんとかしたいなら勉学に励め！」

お前は吉井が絡むと暴走するな！つと西さんがオレの行動を妨害していると言が流れた。

ピンポンパンポーン 《連絡致します》

「ん？放送か？」

「……声に聞き覚えがあります」

《船越先生、船越先生。吉井明久君が体育館裏で待っています》

「……………」

「……おい、黒井？」

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

船越女史。年齢、四十五歳。、独身。婚期を逃したことで成績を盾にしてまで生徒に交際を迫る山婆。……おまけにオレのこともそういう目で見てくる。

そんな危険人物にそんなネタで呼べば明日の朝までも体育館裏から離れないだろうが……。

『須川あああああつっ！』

つと、廊下から明久の雄叫びが聞こえる。フフフフ、そんなに死にたいか、ユウ！！？

「……西さん、離してください」

「……補習中はここから出さんぞ？」

「ええ、大丈夫です」

(ガサガサガサガサ)

服の中を漁り、目的の黒い手の平大の箱を取り出す。

「(カチ)……船越先生、船越先生。二年Fクラスの須川亮くんが「俺も負けられない！」と先生をお探しです。手には赤い《わ》付きのものを持っています。至急、お願いします」(カチ)「

「……黒井。それは没収だ」

「ええ、どうぞ」

西さんに遠隔操作機を渡すと廊下が騒がしくなった。

『船越先生、待ってください。試召戦争の立ち合いを願いたいー』
『邪魔しないで！須川君が持っているのは私の誕生石をあしらったルビーの指輪の婚約指輪に違いないんだから！』

そのまま生徒をもともせず廊下を船越女史が通り過ぎていった。
「……………」

「西さん。眉間にシワが寄りますよ？それと、次はこれを教えてほしいんですが？」

「……もういいのか？」

「はい、生きないとならなくなったので」

そう、ユウに死が救いに感じるようにしないと。

……そういえば、須川は数字テストは《赤丸》が多かったな。どうでもいいけど。……フフ、ユウ。終わったら、遺書を用意しとけよ？遠くで誰かの叫び声が聞こえた気がしたが、無視して苦手な国語を西さんに聞く。……あ、そういう考え方ね。他人の考えは難しいね、ほんと。

八話目（後書き）

書き方が安定しません。毎日更新できる方々を尊敬します。
アドバイス、訂正、感想をいただけたら嬉しいです。

九話目（前書き）

なんとか間に合った、という感じですが。しかし、かなり強引になりました。

小鈴に新たなスキル！？

明久、無自覚の行動！？

どういふことは本編にて。

長くなりました。少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

九話目

Dクラス代表 平賀源二 討死

この知らせによりFクラス勝利が決定した。それにより、補習室からも開放された。(西さんが部屋から解放したと同時にその情報を聞いたのだが、あの人は妖怪センサーならぬ、戦死者センサーでも付けているのか?)

だが、それはこつちにとつて好都合でしかない。今も勝鬨の叫びを上げ続けている廊下にユウがいるに決まっているからな。

案の定。Dクラスの目の前でうな垂れているDクラスの生徒と、喜びまくっているFクラスの生徒。そして、包丁を握っていた明久の右腕を捻り挙げている外道ユウの姿があった。

「……………」
「雄二、皆で何かをやり遂げるって、素晴らしいね」

「僕、仲間との達成感がこんなにいいものだなんて、今まで知らな
関節が折れるように痛いっ！」

「今、何をしようとした？」

「も、もちろん、喜びを分かち合うための握手を手首がもげるほど
に痛いっ！」

「おい。誰かペンチを持ってきてくれー」

「ペンチより、こつちの方がお前を待つてるぞ？」

ユウの喉仏にクナイを当てる。ほんの少し力を入れたり、強引な抵抗をすれば紅い噴水が起ころう。

「ーにやー(…)ユウ、知ってるか？クナイって苦が無い、
で苦無って呼ぶ位、あっさりヤレルから暗殺に多様されるんって。」

「…………にやーって、鈴、お前髪が一部黒くなってるがまさか……………」

髪が黒くなってる？ああ、そこまでムカついていたんだ。でも、まだ一部でよかったじゃん。

「一部にやら半殺しくらいで止まるんじやにやーかな？」

空いている手をユウの襟首にかけ、持ち上げる（……）。ユウの身長は180近い。対して、オレは150+。周りがその異常な光景に固まっているがんなことは知ったこっちゃない。首が絞まりかかっているのを両手で塞ぎながら抵抗しているユウを持ち上げたまま移動しようとする。

「ーあの、クロさん？」

しかし、それを呼び止める猛者^{もの}がいた。自分でもなんだが近寄つたら噛み殺すくらい普通の殺気を周囲に漂わせていたと思つたのに、感情を隠さないままに声へ顔を向ければそこにはDクラスの女生徒。ショートカットにすまし顔、ちよつと鋭い目だがきれいな女の子と、その後ろには青みがかつた髪でこちらに怯えながらも正面に立ちふさがる顔色の悪い男子生徒がいた。内、片方には知り合いだった。

「……なんにや、タマちゃんか。にゃんか用？」

女生徒の方。玉野美紀は店に所属してもらっていて、店員をやつてもらっている。ある程度は信用も信頼もしている。

「……クロネコ化してるところ、止めたくないのですが、その、戦後対談を代表がしなくてはならないのでそちらの代表の処刑を待つていただきたいのですが……」

戦後対談？まだされてにゃかたんか？……仕方によい。後、処刑なんてんな面倒なことはしないよ？

「ホレ、ユウ。サツサと終わらせて華死^{はなしあじ}合するんだから」

「ガツ！ハアツ！ゼエツゼエツ、死ぬかと思つた。つてか、鈴！今、話し合いがおかしくないか？」

「……サツサとヤレ」

「イエスマム！」

オレの感情を逆に無くした声にユウは怯えながらも前にいる男子生徒と戦後対談を始めた。あ、Dクラスの代表だったんだ、彼。

「ーあの、クロさん。それともう一つ話があるんですが……」
ユウが逃亡しないように影を踏みつけながらどう始末をつけようかと考えていたら、申し訳なさそうに玉野が話しかけてきた。

「Dクラスでの店の半営業停止なのですが、撤回していただいませんか？その、ウチのクラスメイトが失礼な事を働いてしまったのは申し訳ないのですが、一部の暴走ですので……」

「営業停止？」

……ああ！あれか。そういえばそんな事を決定したな。でもなあー、
「リン？」

……しまった。失念していた。戦後対談なんて明日、ミイラにしたユウが勝手にやれば良いのになんで止まったんだ、オレ！

背後からアイツの声がする。っというか、いつの間に背後を取られてた！？（最初からです）

「……でもなあ、タマちゃん。あんないきなり暴力に走るような連中相手には商売は危なくない？」

「それは本当にすいません。私と代表が席を外している時に起こってしまったのです」

「ちよつと、リン？」

「……二人が抑止力になるのは知ってるよ？弓道部期待のホープに熱血系の代表だからね。でも、鬼がいないからって洗濯を通り越して暴走つてのは、ねえ？」

「無視！？無視だよね、これ！？」

「すぐに何とかします。どうかチャンスをいただけませんか？……それと、あの、その、後ろの吉井君を無視していいー」

「わかった！見逃す！んじゃ、ユウとの華死合に行ってくるから……」

触れられたくない話を無理矢理終わらせ、ユウの襟首を掴んでこの場から離れようとした。が、その前にオレが襟首を捕まれた。

「……リン？」

……まずい。抵抗不能だ。けど、せめて今日ぐらいは明久と向き合

いたくない。というより、合わせる顔がない。

「……あー、そのー、明久？離してくれにやい？オレ、ユウと華死合をしにやいと……」

「こつち見てよ」

強制する声ではない。しかし、逆らえない。声に悲しみが入っている。けれども顔を向き合わせたくない。ならばー

「土下座したらリンのこと、すすって呼ぶよ？」

「それはヤメテ!!」

それはイヤダ。明久にリン以外で呼ばれるのは勘弁被る。

大声を出しながら振り向いたため、明久の顔が目鼻の先に現れる。

「うっ、いや、あの、え〜と……」

自分でも目が泳ぎまくっているのがわかる。それでも何かを言いたかったのだが、それより先に明久に行動された。

「リン」

「えっ！あう／＼／＼」

明久の両手が頬を挟み、強引に目線を合わせるようにする。

互いの髪の毛が触れ合うほど顔を近づき、顔がマグマのように熱く感じる。

「……リン、ごめん！」

目線が合わさった状態から明久が地面に叩きつけると言わんばかりの勢いで頭を下げてきた。

「え！？あ、ちょ、明久、何ー」

「僕の油断の所為でリンを戦死送りにして、ごめん！」

あの時に、自分が避けていれば。自分が木刀で弾くなり、受け止めるなり出来ていれば。そして、自分が戦死になっていれば……、しかし、それには納得がいかない。

「…あ、明久。それは違うぞ？」

「えっ？」

「それじゃ、オレがお前のために犠牲になったみたいじゃないか？違うっての」

「……………」
「あれは互いに気づいて、オレが行動できた。互いに生き残るために割り込んだんだ。……けど、その、操作が上手くいかなくて受け損なっただよ！」

犠牲になるなんてそんなので満足するように思われるのはゴメンだ。それでも、自分のミスを口に出すのは少々恥ずかしい。

「だから！謝罪なんか困るし、いらない！」

さすがにくさい事を言ってしまった自覚が感じられ、明久との視線を強引に逸らす。

「ーじゃあ、リン。……ありがとう」

「……………フンツ！／／／／」

明久が軽く笑いかけてくるのを横目で見ながら、少しでも顔を見せないようにさらに横を向く。廊下を通る風が涼しく感じる。

「でもさ、さっきは無視しなくてもいいじゃんさあ」

「うっ！」

さっきやってしまった行動で触れられたくない話題に入ってしまった。

「ねえ、なんでさ？」

「いや、その、だって……宣言して早々たいしたことが出来なかった自分が、その、情けなくって……」

明久に覚悟がどうか訊ねるときながら自分は速攻で戦死とか呆れたくなる。その辺の感情の整理が済むまで明久とは顔合わせをしたくなかったのだ。

「たいしたことできなかったって……」

「すみません。口を挟ませてください」

半ば二人だけの会話になっていたところに参入者が現れた。

「えっと、たしかー」

「どうも、Dクラスの玉野美紀と申します。よろしくお願いします、吉井くん」

「あ、うん。よろしく、玉野さん」

「さて、脇で話を聞かせてもらっていたのですが、（たいした事はしていない）というのは反対させていただきます」

「？」

「こちらのクロさんだけの被害が『戦死者6名。回復試験受け直しの者、11名（内、1名戦死者）』と上っています。これはこちらには十分な被害でした」

「うわっ、リンだけでっつてすごいじゃん」

「ですのでたいした事はできなかった、とは言わないでください」

「そうだよ。十分、大活躍だよ！」

「うっ、……わかったよ」

本当はその程度では納得していないのだが、折れとかないと面倒なことになる気がした。

「ありがとう、玉野さん。おかげで助かったよ」

「……いえ、こちらの言いたい事を言っただけですノノ」

あ、明久の（ハートショットスマイル）がタマに至近距離で直撃した。……ただだけど、墮ちるのは切っ掛け次第か？これ以上増えるのも困る。ここは……

「んじゃ、タマちゃん。半営業停止は取り消すけど、次は暴行に走らないように注意して」

「えっ？あ、はい！」

強引だが、ここで話を終わらせる。

「それと、ユウ。話はいいい加減終わってるよな？」

「（ビクンツ！）お、おお。終わってるな」

すっかり空気になって忘れ去られていたが、その間に逃げ出す事もできなかったためこちらに意識を向けられて慄いている。

「この後はどうなっているんだ？」

「あゝ、明日に消費した点数の補給を行うから特にならない、です」

「んじゃ、解散、帰宅だな？」

「えっと、そうです、はい」

なんかユウからドナドナが聞こえてくる気がするし、諦めの表情を

している。けど、

「なら、帰るぞ、明久」

「え?」

「あ、うん」

なんかもうそんな気分じゃないし、窓に映る自分の姿も、髪が元の
<白>にもどっているし。

ユウの影から足を退けて自分の荷物を取りに教室に向かおうとする。

「んじゃ、お疲れ様でした」

「お先にーあ」

明久が思わず出たような声に視線を追ってみると疲れたような表情
のユウに姫路が近づくとこころだった。

「……ねえ、リン」

「ん?」

「帰ったら、勉強教えてよ」

「いきなりどうした?」

「……少しは役に立ちたいなと思ってさ」

ああ、姫路のためのこの戦争。しかし、ユウのように作戦を立てた
わけでも、戦果を上げたわけでもないから、自分を鍛えたいって所
か?

「……OK。西さんじこみの勉強を教えてやるよ」

「ちょ!? 鉄人みたいなのはごめんだよ!」

「ハハハハハッ!」

本気で焦っている明久に思わず笑いが出てくる。

……次こそは最後まで明久の役に立つようにオレも頑張らないとな。

九話目（後書き）

バカテスのキャラ。アニメと漫画。原作で違いますよね？

玉野さんは漫画を。D代表（平賀）はアニメを参考にしました。玉野はあるきっかけで原作に近くはしますが、こんなふうになります。小鈴の謎はまだあります。徐々に出します。

来年もよろしくお願いいたします。

十話目（前書き）

少し強引ですが投稿です。

日常とあの弁当が登場。

少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

十話目

「……何これ？」

「空気清浄機（無音）に吸臭剤（置くタイプ）。後、色々と環境改善のために使えそうな物………とトラップを少々（ボソッ）」

「最後なんて呟いた！？トランプの間違いだよね！？」

その辺は禁則事項です。

あの後には普通に帰ったが、明久が途中で忘れ物を取りに学校に戻ってしまつた以外は何もなかつた。（ついでにこうとしたが先に帰つててと言われた）

夕食を取つた後、しばらくして明久の部屋へ行き、ゲームをしていた明久の頭にハリセンを食らわせ、説教もそこそこに勉強をした。時間はないため簡単な数学の公式をいくつかと、ゲームをしていた三国志に倣つて、その時代辺りの基本的流れだけをまず理解させた。覚えるではなく、理解した方が身につきやすいからだ。

宿題はなかつたためと、明久が時たま意識を飛ばしていたため、そこで終わりにした。学校で何かあつたのか？

ちなみに明久の部屋はちょうどオレの一人暮らししている部屋の真下である。その気になればベランダから互いに行き来できるようにしてある（……）。

……まあ、プライベートがあるから連絡してからしか使わないがな。その後は部屋に戻つて普通に寝た。

次に日は珍しく明久が早起きしたので一緒に行くことができた。その道中で昨日教えた内容を問答しながらの登校だった。（正解率は8問中1問だった）

教室までの間で少々疲れた表情になつてしまつた明久の隣で教室の戸を開ければ、準備していたものが山積みされていた。

そして、冒頭に戻る。

「おい、鈴。こんな余計なもの持つてきて、鉄人に没収されるぞ？」

畳がへこんでしまうほどの荷物の脇に立っているとユウが歩み寄ってきた。見れば片手に英語の教科書持っていて一応、テスト前の悪あがきをしているようだ。

「大丈夫じゃない？（必要なものは自分で調達）って言ってたし。校則には（学校の風紀を乱すもの。授業の妨げになるもの。他人の迷惑となるもの持込を禁ずる）、ってあるだけだし」

「でも、こんなたくさんの道具、どうやって調達したの？」

「うむ、この空気清浄機など高そうじゃし……」

「……来た時には既に置かれていた」

ん？ヒデにムツチーもいたんだ。二人の手には古典の教科書と保健体育の保健側の教科書を持っていた。

「なに、最終チェックの製品や開発の最中の製品の実験にこの環境は差が見分けやすいから、そういったものを引き受けただけ。結果を資料にすれば、バイト代もはいるから助かるよ」

多少、コネを使ってそういった製品を探しはしたんだけどね。後、昨日ので師匠からも支援が入ったし。

「……あんだ、どういう伝をもってるのよ？」

「アハハハ……」

呆れたように言うミナと苦笑する姫路の姿もあった。

「まあ、そんなことはどうでもいいことだ。これで多少はましだろうから配置とか手伝ってくれない？」

「しゃーねえ。お前らも手伝ってくれ」

『『『『『え』』』』』

「売店秘伝、くびつくり饅頭（120円）でどう？」

『『『『『おあ〜！』』』』』

そう言って、クラス全体が一時的に一つとなった。……ホームルームまで時間が無かったしな。

「これってどうぞ？」

「ああ、畳の上に敷けば蓋がわりになるからな」

「そりゃ流石に無理じゃね？」

「大丈夫。Aクラスだって設定にないのに絨毯を引いてるんだから」
「まぢでか!?!」
「本当」

「この清浄機はどこじゃ?」

「部屋の隅かな?」

「……この縄は?」

「ん?トラップようゴホン!ゴホン!なんでもないからコッチに準備して?」

「……(ダクダクツ)」

なんかムツチーがゆっくりと鼻血を出し始めた。また縄で縛りでも考えてるのか?

「ねえ、そういえば最初は何のテストなの?」

「……………」

あれ?なんでユウとか目を逸らすんだ?

「最初は、確か、数学ね」

「監督する先生はー」

ユウが干上がりそうな勢いで汗をかいているが一体ー、

「船越先生ですね」

(ダッ!)

そういうことか。瞬間、明久が風のように走り出し、逃走しようとする、が、

(バシッ シュルルル)

「イヤアアアアア!?!」

「……すまん、明久」

早速準備したトラップに引っ掛かり、天井から縄で吊り下げられた。

……なぜか駿河問いで。

イヤ、ほんと、すまん。

チヨコレート入りだった。

「んじゃセイロとか返してくる」

「あ、リン！屋上で昼食とミーティングするから来てね！」

「お〜」

明久の声を後ろから聞きつつ、セイロを戻しに行く。……ちなみに、コレは【店】が売店に流している商品の一つであるが、今回はハズレが入れられてなくてよかったよかった。

……っと思っていたのだがコレはどういうことだろう。

屋上に遅れながらもやってきたらムッチーにユウが虫の息で明久とヒデが爆破一分前の爆弾処理班みたいな目になっている。加えて、それを悪意無しで微笑んでいる姫路がいる。

「……明久？」

「……リン」

明久が声に反応し、こっちを見る。……あの姫路の弁当が原因か。そして明久、後でお金の使い方は説教な（ニツコリ）。

目で状況を教えてもらい、問題の弁当を見る。後ろで明久が絶望しているが自業自得だ。（おまけに、逃げるなんて言うからだ）

……見た目は普通だが、確かに、カンが警戒を通り越して死すら叫びだしてるぞ、コレ。

「姫路、うまそう匂いだな。どうやって作ったんだ？」

匂いというか本当は死臭なんだがな。

「これですか？隠し味にお味噌とゆず、酢酸を入れてみました」

………んっ？

「………こっちに卵焼きは？」

「そっちはふんわりさせるためにマヨネーズと、酸味が欲しかったので塩酸を入れました」

………おかしいな。耳がおかしいのかな？そう思って後ろを見ると明久とヒデ、死んでいるユウにムッチー全員が震えだしている。…

…うん、聞き間違いじゃないな。

「姫路、味見した？」

「？してませんよ？その、味見をすると太っちゃいますし……」
頬を赤く染めていても今だけは頭痛しかないんだけど。

「…姫路、あー」

「えっ？」

「あー」

「あ、アーン」

（ひよい） 卵焼きを掴む

（ぼい） 姫路の口に放り込む

「……！」「……」

背後で明久達が驚いてるが、こういうのは無理矢理でも自覚させないといけないんだから、多少傷ついてもわからせ…

「…ちよつと酸味が足りないですね」

…ナンダト！？

こんな即死級のものを食べて平気にいる？！

「……ひ、姫路さん。大丈夫なの？」

「？はい。次は硝酸を足してきますね」

「ば、ばかな……」

明久が絶句しているが、確かにこれに耐えるなんてどんな耐性が…

…耐性？

まさか……

「……姫路、料理は誰に学んだ？」

「えっ？お母さん直伝ですよ？」

「…ってことは、日頃から食べているのか？」

「？はい」

つまり、こういうことか？姫路が身体弱いのは毒物に身体がついていないのか？というより、日頃から食べているってどんな忍者の家庭だ！？

「…姫路、頼み事をしていいか？」

「あ、はい、どうぞ」

姫路の了承をもらい、自分の懐から紙とペンを取り出す。

〔拝啓、姫路殿の母君〕

始めまして、姫路殿のクラスメートの者です。

不躰がましいですが、貴殿の娘さんの料理ですが一般人には厳しく、素人でも食せるよう毒物や薬品を抜きにしてから振る舞うよう指導願いたい。

また、娘殿は身体がついていけないようなのでそういう物の量を減らしていただきたく存じます。

よろしくお願いいたします。

「…コレを、お前のお袋さんに渡してくれ」

「お母さんにですか？」

「頼む」

「わかりました」

そう言うと失くさないように鞆の中に入れてきます、と言いつつ、席を立った。屋上にやけに冷たい風が吹き込んでくる。イヤハヤ。驚いたよ、まったく。

十話目（後書き）

…食べ物粗末にはいけません。

明久の消火器やミナのランキングがここではなかったみたいです。

アドバイス、訂正、感想をいただけたら嬉しいです。

今年もよろしくお願いいたします

十一話目（前書き）

すみません、私情で死んでいました。ようやく更新です。
屋上ミーティングで現れる【ここ】の明久の変化。
少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

十一話目

「ほれ、これを飲め」

「待て！なんだソレ！？湯気も無いのにぐつぐついつて、液の色が虹色だぞ！？しかもたまに叫んでないか、ソレ！？」

「店で売ってる解毒剤だ。たいていのものは解毒できる」

「……死にたくない！」

「安心しろ、死にはしない。……副作用でしばらくたらこ唇になるが」

「「安心できるかあ！！」」

おっ？ムツチーが珍しく大声を出してる。でも……、

「……いいから飲め！」

ガバッ！ 二人の口に劇薬投入

「「ガハッ！！」」 血反吐を吐いた

バタン！

「「死んだ！？」」

死んでない、死んでない。

しばらくコンクリートと同化していた二人だが数分後には顔色も含め元に戻っていた。

「……あゝ、死ぬかと思った」

「ぶつくくくく」

「……思ってたよりキモいな」

「誰の所為だ！」

ただし、二人揃ってあゝごさんのように唇がはれあがっているが。

「一体二人に何があったのよ？」

「さあ、私が戻ってきたらもう……」

知らぬが仏だぞ、お二人さん。

「雄二よ。そろそろ話を進めんか？」

「……わかったよ」

こちらを睨みつけていたユウだが、諦めたようにため息をついたあと本題に入る。

「次はBクラスが相手だ」

「どうしてBクラスなの？目標はAクラスなんでしょう？」

確かに、最初に掲げたAクラス宣言とは違い別クラスに攻め込んでいる。例の作戦って奴か？

「コノ前のDクラスを攻めたのもなんでだ？その辺の話を聞いてないんだが？」

前回のミーティングに参加していないからその辺を聞いてみるとユウは明久を睨みつけた。

「…明久、話してなかったのか？」

「あゝ、忘れてた」

「はあつ、お前みたいな鳥頭に頼んだ俺がバカだった」

露骨に肩を落としてため息をつき明久を罵倒するが、悪口を言われたと分かってても意味までは分かっていないので明久が歯を食いしばっている。

「明久落ち着け。んで？どうなんだ？」

「お前の周りの面子はどんなんだ？」

周りの面子？…明久、ユウ、姫路、ミナ、ヒデにムッチー、か……。

「…無二の存在一人、外道一人、天然危険物一人、親友一人、女形一人、スパイ一人だな」

「誰が天然だ！？」

「お前は外道だ！」　　明久＋オレ

「誰が女形じゃ！？」

「お前だよ！」　　ユウ＋オレ

「…天然危険物ってなんですか？」

「……」

…貴女のことです。とは流石に言えないな……。間違った知識であんな料理を作ったとはいえ。

化学の成績は悪くないはずなのに、なんで薬品を普通に料理に入れるのかわからないが、それを思い出すと男性陣が奮え出すので話はそこで強引に打ち切った。

「…ったく。つまり、Dクラス戦は姫路と鈴の点数回復のため、試召戦争に全員慣れてもらうため、その他の目的に必要なだったからだ」
「…Eは戦う意味がなく、Dにはあつた……。次はBクラス……。設備交換をしなかった……。そして目標…！…ずいぶんな手だな、ユウ？」

「…わかつたのか？」

「ああ……。かなり酷いな。んで、注文があるんだろう？」

「いくつかはムツツリー二が持つてるが足りないからな」

こいつがやるうとしてるのがわかつたが、それを悪びれもせず行うなんて…元、神童の狂い所つてところか？

「えっ？鈴、わかつたの？」

「一体、どうということなんじゃ？」

ミナとヒデが首を傾げて尋ねてくる

「あゝ目標と勝利条件、戦力で考えればなんとなくはな」

「…？」

「つまり、Aクラスとは試召戦争はやらない。というより、やれないのさ」

「…どうということ？わかる、瑞希？」

「さあ？」

「回りくどい事を言わんで教えてくれんか？」

「おいおい、考える事を放棄したら早死にするぞ？なあー」
頭を抱えるように考えている面々から視線を動かし、

「明久、お前も分かつたよな？」

「…ええっ！？」

明久を見てそう言えば、全員が驚いて明久に視線を向ける。

「…なんとなくどうしてか、ぐらいまでかな？」

まあ、そこまですも十分だろう。

「んじゃ、どうしてか？」

「Fクラスの戦力でAクラスを倒すのは無理だから？」

そう、二つのクラス間で戦力を比べるのはバカバカしいくらいに開いている。例えるなら……ティラノサウルス対赤子（銃付き）くらいか？

「姫路さんの成績がトップクラスでも流石に全部は相手できないし、それにAクラス上位がほぼ無理」

「んじゃ、Bクラスを攻める理由は？ヒントは勝利条件と変更」

「……交渉するためのカード。まともに戦えない。こちらの戦力は上がらない。なら、相手をどうにかして勝てる位置まで持ってくる。まともに戦わず、例えばクイズの早押し対決みたいにして勝負をする」

「あゝ惜しい。早押しじゃテスト要素がなくなるから駄目だな。あくまで、【試召戦争】をしてるんだからな？」

「あ、そっか。……って皆どうしたの？」

「んっ？」

明久の目線を追ってみれば全員が豆鉄砲……いや、ミサイル爆撃を喰らったような顔をしてこちらを見ていた。

「……あ……」

「あ？」

「明久がまともになった!？」

「……はあっ？」

何を言い出すんだ、コイツは？と思っていたら、それに反応するように周りも騒ぎ出した。

「吉井、あんた熱でもあるんじゃない!？」

「吉井君、保健室へいきましよう!？」

「今日は大雪が降るかのう？」

「馬鹿!雪どころか隕石が降ってくら」

「……地球最後の日か？」

「いい加減にしろ!」

スパパパパン！！！！

「……ギャン（キャン）！！」「……」

暴走している面々を正気に戻す。比較的軽くやったから負傷まではいかない。

「ったく、黙って聞いてれば……。明久とオレに喧嘩売ってるのか？」

「だ、だって……」

「だって、明後日もあるか！」

「吉井君がいきなりあんな事を言い出すから……」

「姫路さん！？これってバカにされてるよね！？」

「明久、悪い物でも食さなかつたか？」

「まだ言うか、こら」

「……そうか、わかつた」

「……何がわかつたんだ？」

少し強めにハリセンを炸裂させたから頭を抱えるようにユウが立ち上がり、言い始めた。

「明久がさつき食べたびっくり饅頭。ス力ではなかつたんだ」

「……」

いきなり何を言い出すんだ、コイツ。という視線をぶつけるが、それを気にせず続ける。

「あれにはバカをまともにする薬が入っていたんだ！」

「言うに事欠いて、何言ってるんだよ、おい」

「……成る程」「……」

「お前らも納得するな！って明久！？」

全員を再度叩きのめそうとしたが、その前にあるものが視界の端に入った。……屋上の柵を乗り越えようとしている明久の姿が。

「明久！やめろ！」

「放して！僕はもう生きる気力を失ったんだ！」

「お前が死んだらオレはどうやって生きていけばいいんだよ！？」

「大丈夫……。リンなら僕がいなくても大丈夫だよ……」

「おい、明久。屋上を禁止になるからここで死ぬな」

「お前らも止める!!」

「グスングスンッ」

「おお、よしよし。オレはお前の味方だからな？」

抱きかかえるようにして明久の頭を撫でて落ち着かせる。なにやら怨嗟と嫉妬の視線が集まっているが知ったこっちゃ無い。

「…ってか、そんなものをぶつけるぐらいならやるなっつての。」

「そんで、ユウはどうするんだ？」

「Bクラスを落としてAクラスと一騎打ちに持ち込む」

まあ、BクラスならAクラスも無傷って訳にはいかないから交渉的には大丈夫か？

「じゃが、なにやら問題があるじやろう。体力として辛いし面倒じやが、一騎打ちよりも試召戦争の方が確かじゃから交渉が上手いくかどうか。それにー」

「それに？」

「そもそも一騎打ちで勝てるのじやろうか？姫路の存在は先の戦いで知れ渡っているじやろう？」

まあ、下位勢力が勝つたの理由はすでに知られているはずだから他に切り札が無ければ無理だろうな。

「そのへんに関しては考えがある。心配するな。とにかく、Bクラスとやるぞ。何か質問はないか？」

「…ユウ一っいいいか？」

「なんだ？」

作戦を聞いていたら思った疑問。そして穴。

「Bクラスと戦うのは必須なのか？」

「…どういうことだ？」

「相手の大将、誰かが分かっているのか？」

「大将？」

…やっぱり知らないのか、コイツ。

「…ユウって大将向きだけど、軍師向きじゃないよな。つまりー」
「まあ、その辺はオレらの裏技だからな。イロはつけてもらっぞ？」

十一話目（後書き）

次回、ユウの作戦の穴が判明……なのですが、私情でちょっと更新が難しくなるため、つぎの更新は2月14日です。
誠に申し訳ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0900z/>

バカとリンと召喚獣

2012年1月12日23時59分発行